
とある最強の抑止力

Pearl

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最強の抑止力

【Nコード】

N4098X

【作者名】

Pearl

【あらすじ】

『とある魔術の禁書目録』。その世界に迷い込んだとある転生者。彼／彼女の存在はその世界で何をもたらすのか――科学と魔術が交錯する世界で『無』能力者である少女が新たな物語を紡ぎだす。

序 章 とある転生者と学園都市へトリップワールド〈前書き〉

初投稿です。拙い文章だとは思いますが、ご容赦のほどを。
感想、ご指摘があれば遠慮なくどうぞ。

出来る限り参考にさせていただきたいと思えます。

序 章 とある転生者と学園都市へトリップワールド

いきなりだが、氷室皐月は『転生者』である。

言うまでもないことだろうが、環境や生活を一変させる意味での『転生』ではなく、生まれ変わりという意味での『転生』だ。

いや、環境や生活も一変したのでどちらにも該当するというのが正しいのだろう。

元は有り触れた日本人の成人男性。それが、何の因果か死後、気が付いたら少女の赤子となっていた。それも記憶と知識を引き継いだ状態で、だ。

要するに漫画や小説などでありがちな所謂『TS転生』と呼ばれるもの。

もつとも前世の記憶は生まれ変わった瞬間に全て思い出せたわけではない。成長するにつれ徐々に、おそらくは脳の成長に合わせる形で思い出していき、自覚していった。

ともあれ、当初は混乱の極みにあったものの、15年も経てば自ずと落ち着きを取り戻す。

生まれ変わったことについては単に『ラッキー』と思えばいいだろう。

しがないサラリーマンだったため、財産なんて呼べるほどの蓄えはなかったし、両親はすでに先だった後だ。兄弟や妻、恋人、子供もいなかったし、親しい友人は居たものの、こればかりはどうしようもないとあきらめるしかない。心残りと言えば、読みかけだった小説の終わりと、借りっぱなしのAVを誰が返却したのか、とそのあたりだろうか。

一方、女となってしまったことについては、意外と如何にかなるものだ、というのが実際のところだ。

少なくともよくありがちな“初めて”やらなんやらで無様な混乱は

なかったと思えるし、自己の性を否定して突発的に死にたくなったりなどはしていない。普通にスカートだって履けるし、下着類も女性用のものをちゃんと使用している。ただフリルやレースがふんだんにあしらわれた服だけは、どうにも受け入れられない——その程度だ。

つまり、さほどの混乱もなく、氷室皐月は現状を受け入れている、というわけだ。

さて、そんな『転生者』である氷室は、当然のことながらその頭脳は大人である。

日本人であるため義務教育はもとより、慣例に従い高校、大学と進学した身の上である以上、相応の学力は備わっている。また体力面でもそれなりに鍛えてあるため、学生生活は優位に立てる——

（はず、だっただけどねえ……）

「はい。それじゃ先生プリント作ってきたのでまず配るですー。それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

そう、補習である。

チートとまでは言わないが、かなりのアドバンテージを持って生まれてもなお“ここ”ではそんなもの何の意味もなさない。

確かに“ここ”は『外』とは隔絶した高度な科学力を持ち、それに比例して要求される学力も高い。しかしそれに見合った教育は施され、スタート地点ですでに優位に立っている氷室にしてみれば、少し頑張れば成績優秀者として補習などとは無縁の生活を送れているはずなのだ。

事実、氷室の学力は極めて高い。

ペーパーテストではさすがに満点とは言わないものの、平均点を大きく引きはがす得点をマークしており、体育の成績もそれなりにい

い方だ。それならば当然補習に引つかかることなどありはしない。
しかし現実には非情な補習宣告。

ちなみに本日は7月20日。世の学生たちにとっては『夏休み初日』
という記念すべき日である。

（うう、今日は『夏休み突入記念サマーバーゲンセール』の初日
だっていうのにい）

初日だからなんだ、というかもしれないがバーゲンというのは戦場だ。しかも今日という日に限っては世の学生たちが学業という檻から解放されたのだ。財布の紐が緩むのは必然。そこにとってつけたかのような———というか、まさしくとってつけた大安売りであれば即時完売する商品も一つや二つではあるまい。店側も大量在庫で大儲けを期待しているだろうが、店舗スペースを考慮に入れば、その数は自ずと限られてくる。

しかし補習の終了予定時刻は正午0時。

この遅れは致命的だ。特に『服集め』が趣味の氷室にとってクリティカルダメージだ。HPの実に八割が一瞬にして削られる。

ならば初めから補習なんて受けなくて済むようにすればよかったではないか、というかもしれないが———努力はしたのだ、これでも。

先にも述べたとおり、ペーパーテストの成績は決して悪くはなく、授業態度にも特に目立った問題はない。

これが“普通の”学校ならば文句なく補習免除だ。

その上、今回は近年稀に見る本気で挑み、ほぼ満点に近い成績を叩き出した会心の出来だった。

しかし、それでもなお補習が免れないのには、そこに氷室自身の努力ではどうにもならない問題が横たわっているから。

こればかりはどう足掻いたって無理だ。不可能だ。どうしようもな

い。

（はあ……）

氷室がそんな絶望に満ちた深いため息を心の中で吐いている間にプリントを配り終えた、どうみても「身長135センチ十二歳、真っ赤なランドセルとリコーダーが標準装備です」な小学生にしか見えないロリイなクラス担任月詠小萌（アラサー）は、全身を精一杯大きく見せながら声を上げた。

「おしゃべりは止めないですけど先生の話は聞いてもらわないと困るですー。先生、気合を入れて小テストを作ってきたので点が悪かったら罰ゲームですけすけ見る見るですー」

「つてかそれ目隠しでポーカーしろってアレでしょう先生！ ありや透視能力専攻の時間割りだし！ 手元のカードも見えないのに10回連続で勝てるまで帰っちゃダメとか言われたらそのまま朝までナマ居残りだとわたくし上条当麻は思うのでせうが！」

あまりに非情な仕打ちにツンツン頭の青年——上条当麻が一縷の望みを託すかのように叫びを上げた。

無理もない、と氷室も思う。彼の発言にもあるとおり、目隠しポーカー10連勝なんて“普通の”人間では無理だ。

確かに“運良く”“偶然”“奇跡的”に10連勝できる可能性はある。だがそれは本当に“運が良く”て、“偶然”で、“奇跡的”な確率でしかない。

そんな万に一つみたいな奇跡の産物を、赤点の罰ゲームにするなど“普通の”学校ではまずありえない——というか、ありえてはならない。それは単なる『虐待』でしかない。

しかし“ここ”では別だ。“ここ”ではそれが『当然』なのである。

そんな“運が良く”て、“偶然”で、“奇跡的”な確率を100%に変えてしまう力——『超能力』なんて代物が実在する、この『学園都市』では。

一昔前ならばフィクションの産物と一笑されていた『超能力^{シロモノ}』は、科学的に解明され、現在では人為的にその力を持つ者——『能力者』を生み出すことすら可能となっている。

それを実現し、今なお更なる高みを目指すために存在するのが、ここ『学園都市』だ。

日本の首都東京の西側三分の一を占めて設立された『学園都市』は、その名にあるとおり多くの学校と研究所で埋め尽くされ、またそれらを客とする商業施設やレジャー施設や各種公共施設、果ては専用の空港まで完備されており、都市として必要なものは全て揃っていると云っても過言ではない巨大都市である。

むしろ『街』というより一つの『国』と称した方が早く、総人口は実に230万人とも言われ、その8割が学生である。

そしてその数は同時に『能力者』の数でもある。

学園都市はあくまでも『超能力研究』の場だ。そのために設立された街ではあるが、超能力者が路端の石ころのようにそこら中に転がっているわけではない。

そのためその研究・実験を行うには自らが編み出した『能力者開発技術』を用いて、被検体となる『能力者』を独自に調達する必要があった。

そこで目を付けたのが『学生』である。

能力の使用には得てして高度な演算能力が要求され、その演算力次第で威力が上昇する傾向がある。そのため能力者に対し高度な知的教育を行うのは必須事項であり、そのための学び舎を設立するのは当然の行為であった。

ならば、逆にそうした学校に通う『生徒』を能力者とし、実験の協力者とすればどちらにとっても益になる関係を築くことができるのではないか、と考えたのだ。

学園都市に通う生徒は、入学と同時に超能力研究の被検体としての

契約を結ばされ、脳の『開発』——薬物投与や直な電気刺激など——が行われ『能力者』となり、その力を研究のための資料として提供するのが決まりとなっている。

無論、当初は相当の反発があつたそうだが、現在そうした声は下火だ。

その原因は学園都市が能力開発の副産物として手にした高度な科学力にある。

その力は『外』と比べ実に数十年分の差があるとされ、それに釣られるように学校側の教育もより高度なものへと転じていく。それこそ『中』では場末の学校を卒業したとしても、『外』では一流大学を卒業したぐらいの学力が身につくのだ。

さらに都市内での生活は最低限保証されており、実験協力の見返りとして『奨学金』の名目で生徒にはお金が振り込まれる事にもなっている。

水道光熱費は格安で、娯楽品には若干の税が加算されるものの、最先端科学に裏付けされた、それこそ『外』から見れば魔法のような製品が次々と登場し、売り出され、それでいて常人には扱えない『超能力』まで手にすることができる。

それこそ『脳を弄られる』ことすら霞んでしまうような、そんな夢のような生活を前に、人々の心は『学園都市』の存在を許容した。

しかし、現実というのはそんなに甘いものじゃない。

「はいー。けれど上条ちゃんかいはつは記録術の単位足りないのですどの道すけすけ見る見るですよ？」

可愛らしく小首を傾げながら満面の営業スマイルを浮かべる子供こもえ先生の非情なる一言に、上条少年は絶望に打ちひしがれ絶句する。

そんな級友の姿を見て、彼の隣に座る青髪ピアスの学級委員（男）が「…むう」と呟くと、

「あれやね。小萌ちゃんはカミヤんが可愛くて仕方がないんやね」
「……おまいはあの楽しそうに黒板に背伸びしている先生の背中に悪意は感じられんのか？」

「……なに？ ええやん可愛い先生にテストの赤点なじられんのも。あんなお子様に言葉で責められるなんてカミヤん経験値高いでー？」
「……ロリコンの上にMかテメエ！ まったく救いようがねーな！」
「あつはーッ！ ロリ『が』好きとちゃうでーッ！ ロリ『も』好きなんやでーッ！！」

「雑食！？」

ぎゃあぎゃあと騒ぐバカ二人の姿に氷室はもう一度ため息を吐く。
何を下らない話をしているのか。この二人はいつもこんな調子のやり取りを続けている。

だがそれは『外』となんら変わらない、『学生』の姿でもある。

どんなに高度な科学力を持ち、一流大学を優に超える教育を受けていても、そこに暮らす人々はただの『人間』だ。人間である以上、クラスメイトとのバカ話もすれば、補習は嫌だと思っし、強制居残りも御免被る。

何も変わらない。能力者であれ、そうでなかれ、人の本質は何も変わらない。

だというのに――

「安心しなさい、上条当麻」

「ん？ ……氷室？」

「私も同じだから」

そう、追加の補習を受けるのは彼一人じゃない。

おそらく――否、間違いなく氷室も帰れますけすけ見る見る10確定者だ。

これはもう瀕死のダメージに上乗せしてバットステータスのオンパレード間違いなし。氷室の気分は急転直下の大暴落、ストップ安記録を絶賛更新中である。

が、その意図が正しく伝わらなかったのか「へ？」と間抜けな顔を晒す上条の脇で、何やら目を丸くしていた青髪ピアスが突如雄叫びを上げた。

「な、なんやてえー！ ひむろんもロリエm——ふぐおっ！！？」

瞬間、青髪ピアスの顔面に飛び蹴りを喰らわせた氷室は間違っていないと思う。

「え、氷室って幼女趣味なのか？」

「違う！ そっちじゃなくて補習の方！ あと『ひむろん』言うなあ！！」

「——ぐほお！？」

床に倒れた青髪ピアスの腹を踏みつけた氷室の横で、上条はようやく納得の意を浮かべる。

「あ、ああ……そういえば氷室も能力テストの点悪かったって言ってたな……」

悪かったというか『0点』である。問答無用に赤点である。

学園都市の存在意義が『超能力研究』にあり各学校は能力開発実験の場として存在する以上、そこに通う『生徒』は学生としての『学力』よりも被検体としての『能力』の評価の方が優先される。

それを調べるのが定期テストと同時期に行われる能力テスト——『システムスキャン身体検査』だ。

主な能力系統である『予知能力』プレコグニション 『透視能力』クレアボヤンス 『読心能力』サイコメトリー 『精神感应』サイコキネシス 『念動力』の六項目に対し行われ、その何れかである程度の数値を叩き出せば合格となる。

無論、数値が大きいほど能力が強力である証であり、評価もそれに

応じて高くなる。

逆に規定値以下だった場合は、問答無用で『無能』の判定が下る。そして学園都市のおよそ6割の生徒はこの“規定値に満たない”『無能』力者だ。実感できるほどの、目に見える形で姿を現すほどの力を持たないのであれば、それは最初から『無』いのも同じこと。だがそれならそれで規定値を越えられるよう努力すれば『無能』を脱する事ができる。つまり努力はちゃんと実を結ぶ可能性を残しているのだ。

しかし氷室の場合は、その考えすら当てはまらない真正正銘の『無』能力者だ。

『身体検査』の結果は常にいずれの項目においても0点を記録する。待てど暮らせど、欠陥が千切れるほどに踏ん張ってみても1ミリどころか1マイクロミリすら計測器の針は一切触れないため、結果は常に『測定不能』を記す。

そのため『無能』^{出来損ない}ではなく、『無』^{存在しない}能という意味での『無能力者』として『書庫』^{バンク}には登録されている。

確率的には非常に希少なケースで、小萌先生曰く「だからこそ調べる価値がある」と絶賛する存在なのだが、それを受け取る本人してみれば強制補習の最低評価としか捉えることなど出来ようはずもない代物だ。

言わばそれは『才能』の差というもの。

どんなに努力しようと普通の人間が水中で生活をしたり、空を単独で飛ぶことができないように、その壁は決して努力のみでは乗り越えられない。

だから『無』能力な氷室の努力は、『超能力者』の街では決して評価に繋がることのない『無』駄な努力に過ぎないのだ。

「なんつーか、お互い不幸だよな……」

そう呟く上条もまた、氷室と同じ『無』能力者だ。同病相哀れむと

いうか、共通事項を持つ者特有のシンパシーを感じている。

そしてそんな『^{バカな子}無』能力者が大好きで思わず補習を^{かま}充実させたくないとなってしまう小萌先生が担任となってしまったこと、これが二人にとって何よりの不幸である。

「あ、あの氷室ちゃん。お気持ちはわかりますけど、それぐらいにしてくれないと先生授業が進められませんですー」

「すみません、つい……」

眉を顰め困った顔を浮かべる小萌先生に頭を下げ、氷室が自らの席へと戻ろうとし――

「むう……、黒の紐パンか。ひむろんは胸だけやなくて下着までエロエロやなあー」

足元から聞こえたそんな声に、氷室は身を強張らせた。

言うまでもないが、女子の学生服というのはどの学校でもスカートがデフォルトである。

当然、（現世では）女子である氷室もそんな女子制服に身を包んでいる。

そんな格好で青髪ピアスへの飛び膝蹴り後、腹への踏みつけ。そして“その場から動かずに”小萌先生への謝罪を行ったのなら――

結論――未だ青髪は氷室の足元に“仰向け”で倒れたまま。

「――って、待て待て氷室！ その大リーグボールみたいに振りかぶった青髪をどうするつもりだっ！？」

「今日は空が青いわねえー」

「投げる気満々っ！？ それも外に！ つーか、ここ4階だぞっ！」

「大丈夫。ギャグキヤラは死なないのがお約束よ」

「それは漫画の世界の話であって現実にはありえないからっ！ オ

カルトだからそれっ！」

「科学とはオカルトを実証するために存在するもの。彼にはその礎になってもらいましょう」

「つて、端から殺す気かよ！」

「大丈夫。彼が死んでも変わりはいるもの」

「青髪っ——！？」

某世紀末黙示録に登場する使徒な少女の名言に思わず反応を返す上条。

確かに髪の色と語感^{ざんねん}は似ているが、当然ながら青髪クローンでもなければ使徒でも女ですらない。

「……なあカミヤん」

「青髪、気が付いたのかっ！」

氷室に胸倉を掴まれ宙づりにされている青髪ピアスに上条は必至で声をかける。

「お前から何か言ってるやれ！ でないと殺されるぞ！ てか、その前に謝りやがれコノヤロー！」

元はと言えばこのバカがスカートの中身を覗いたりしたのが原因だ。たとえそれが不慮の事故であつたとしても——いや、なくても口に出すべきじゃなかった。

触らぬ神に祟りなし。逆に言えば触つたのなら祟られる。口は災いの元というが、今の状況がまさしくソレである。

「早く言え！ さっさと謝れ！ 言つとくが氷室はマジ本気だぞ！？」

自業自得とはいえ見捨てるわけにもいかない上条の必死の訴えに対し、当の青髪は——、

「こない美人に殺されるかと思うとゾクゾクせえへん？」

「そつだコイツMだつた——っ！？」
「それも真正のDM。」

「じゃ、本人の了承も得られたところで：You can fly——」

「だあー、だからやめろって——」
力を籠め投げ放とうとする氷室を引き留めるべく、上条がその“右手”で青髪の体を掴み——

「あつ——」

「——へっ？」

ピシリッ、と何かがシュートしたかのような感覚とともに“体重が増した”青髪を支えきれなくなった氷室が上条すらも巻き込んで後方に倒れた。

「痛つ——！？」

「はわわ、大丈夫ですか氷室ちゃん、上条ちゃ……ん？」

あわてて駆け寄った小萌先生が二人に声をかける。一人足りないような気もするが、おそらく気のせいだろう。誰も気にしてない。

しかしその言葉も、駆け寄ったことで状況を把握したがゆえに途切らざるを得なかった。

「……………」

教室に言い知れぬ沈黙が落ちる。

そんな微妙な雰囲気、倒れた際の痛みを堪えた氷室は周囲を見渡し首をかしげる。

皆が皆、自分の方を向いて目を丸くする様は異様だ。特に女子生徒は顔を赤くし手で覆う者や同情の視線を投げかける者もいる。

（なにが……）

起きているのか。それを探り当てるより前に、

上条、青髪に続く三バカトリオの一角、土御門元春が爆弾を投げ込んだ——戦略級の核弾頭を。

「いや、カミヤんは幸せ者だにやー。パンツ見せてもらえるだけじゃなくて“押し付け”までサービスしてもらえるなんて」

その一言に今度こそハッキリ氷室の心が凍りついた。

後ろに倒れこんだ結果、氷室は床へと座り込んだ形だ。

しかし何故だかそのお尻は床に触れてはいない。何かやわらかいくツシヨンのようなものがそれを拒んでいる。

下を見る。

少し広がったスカートの端から覗くのは、ツンツンに尖った髪の毛。つまりは人。それも頭部。

理解した。

自分はツンツン頭の少年——上条当麻の顔の上に座り込んでいるという現実を。

「……ふふ」

自然と笑みがこぼれた。

すくつ、と立ち上がりその場から一歩引く。

「……………」

下敷きになっていた上条当麻が姿を現したが、彼は何も言わない。

否、言えない。

顔が赤く、鼻から赤い液体が垂れているが、そんなことを気にしている余裕はない。

上条当麻は『不幸』に愛された少年である。
今朝も昨夜の落雷により電化製品が全滅し、冷蔵庫の中身も全てダ

メになり、非常食のカップやきそばを食べようとしたら流し台に麵を全部ぶちまけ、仕方がないから外食しようとサイフを探している内にキャツシユカードを踏み碎き、ふて寝の二度寝の泣き寝入りを電話で叩き起こされたと思ったら『上条ちゃん、バカだから補習ですー』との担任からの連絡網^{ラフコル}。そして布団を干そうとベランダに出てみれば真つ白な修道服を着たシスターがすでに干されており、行き倒れというので賞味期限切れのパンを悪戯心で差し出したら腕ごと食われ、『魔術』がどのというシスターと言い争いをした拳句、彼女が来ていた修道服『歩く教会』を右手でつかんだ瞬間、ものの見事にはじけ飛び、その中身を御開帳させ、直後怒りに狂った素っ裸の少女に全身を噛み付かれるという稀少^{レア}な体験をしてきたばかりだ。

そのシスター曰く、上条の『右手』が空気に触れているだけで彼が本来受ける筈の『神のご加護』だとか、『運命の赤い糸』だとかをバンバン打ち消してしまっているかららしい。その話が嘘か真かはさておくとして――

事実、上条当麻は『不幸』に愛された存在なのである。

そしてそんな上条にとって『幸運^{ラッキー}』とは、その後の更なる『不幸^{アンラッキー}』へのフラグであり、

それは今回もおそらく、いや絶対にご多分に漏れることはなく――

「上条君？」

「え、えーっと氷室さん？」

「……言い遺すことは？」

「いきなり死刑宣告！？」

「何か問題でも？」

ニツコリと笑みを浮かべる氷室。笑顔とは本来攻撃的なものである。
「ないなら――」

故に、

「死にさせエエエ！」

「不幸だああ——！！！」

少女の上履きが上条の顔面を踏み砕くまであと0・5秒。

第一章 とある無能力と原作開始へファーストコンタクト

案の定、すけすけ見る見る帰れま10の刑に処された氷室は、夏休みの補習だというのに完全下校時刻までしつかり拘束された。

その後急いで『夏休み突入記念サマーバーゲンセール』という名の戦場に飛び込んだものの、目当ての品は粗方掃討され売り切れた後。それでも一縷の望みを託し、戦場方々を駆けずり回ったものの、手に入ったのはほんの僅か。

「……、不幸だ」

昼間公開処刑に処した少年の口癖をつい口遊ぶ氷室のテンションはもはや地の底を割って淀んでいた。

その上、この学園都市の交通機関は学生たちの健全なる育成のために最終便が下校時刻に合わせて運行されており、夕方を僅かに過ぎた程度のこの時間にも関わらず一切走っていないのである。

必然的に帰宅は徒歩となり、夜の帳が落ちた学園都市の道を一人寂しく寮へと向かって歩くしかないのだ。

夜は嫌いだ。

夜の闇は嫌なことばかりを思い出させる。

一人で居るのも嫌いだ。

孤独は不安を増長し、自分はこの世界に一人取り残されたかのような錯覚を覚えてしまう。

静かなのは嫌いではないが、好ましくはない。

お祭り騒ぎが大好きというわけではないため進んで騒ぎに混じろうとは思わないが、それでも静かすぎるより気が楽だ。

生まれ変わったことで文字通り世界は一変した。しかし嫌いなもの

ばかりが増えた気がする。

確かに前世の人生は碌なものではなかった。両親には早々に先立たれ、顔はブサイクで、普通に食事をしているだけなのにすぐに太る体質だった。

学校ではイジメられ、社会に出ても同じくイジメられた。

死因もそんなイジメの延長上で、通りすがりの女子ＯＬにさりげなく引っかけられたことで運悪く階段下へと落下。そのまま帰らぬ人となった。

まさか彼女も死ぬとは思わなかったに違いないが、かといって彼女が罪に問われるかと言えば微妙なところだ。

故意か否かなど本人とその周囲の人間の認識によるものだし、その全てから疎まわれていた自覚がある以上、彼女の方に味方する人間は多そうだ。ただでさえその子は美人で人気が高かったし。

それに転んだ先が階段だったのは本当に偶然であり、そうじゃなければ死ぬようなことにはなりえなかった。

だから万が一捕まったとしても証拠不十分で釈放され、良くても執行猶予判決がせいぜいだろう。

死んでなお、誰一人見返すことができないなど、おかし過ぎて涙が出そうだ。

そんな状況だったから、必然的にオタな引き籠りとなり、仕事以外で外出することなどまずありえなかった。

ネットとアニメと漫画が趣味で、ライトノベルを読みふける日々だ。昼よりも夜の方が好ましく、他人とコミュニケーションを取るなんて以ての外だった。

それが今ではどうだ。

ブサイクだった顔は誰もが羨むほどの整ったものとなり、引き締まったスタイルと大きな胸元は通りすがりの男子を振り返らせることも多く、一人街中に立っていれば自意識過剰な野郎に声をかけられ、告白を受けたことだって一度や二度ではない。

そして前世では夜行性だったのに今では夜が嫌いになり、引き籠りだったのに今では一人が嫌いになり、静かな生活は大歓迎だったのに今では逆に落ち着かない。

（まるで別人ね……）

こんな女言葉が自然と出てくる時点でもうそれは証明されている。未練があるわけではないが、かといって現状とどちらが良かったかと問われれば答えに窮す。

嫌ではない。美少女となり、友達も増え、イジメられることもないこの人生が嫌なはずがない。

でもそれだけでこの世界——前世で読んでいた『とある魔術の禁書目録^{ベル}』の世界に生まれ変わったことが“よかった”とはけて思えない。

『無能力者^{レベル0}』だし、補習の常連だし、ナンパはウザいし、帰り道は一人寂しくだし、嫌いなものがたくさん増えた。

そして何より、氷室皐月は『自分』が一番嫌いだった。

自分は誰かに評価されるような人間ではない。誰かに評価されていないような人間ではない。評価されるようなこと自体、あつてはならないことだ。

何故なら——

「……サイレン？」

ふと氷室の耳に甲高いサイレンの音が飛び込んでくる。

近くで火事でもあったのだろうか、と首をかしげる氷室の鼻が“嫌な臭い”を嗅ぎつけた。

それは焼け焦げた煤の臭いではなく、鉄錆にも似た鼻を突くようなそんな臭い。

「……血？」

“嗅ぎなれた”その臭いに顔を顰め、走り出す。

血の臭いがするということは誰かが傷を負っているということだ。それもすり傷やかすり傷ではありえない。こんな場所まで臭いが届くのならば、まぎれもなく大怪我を負っているはずだ。

進むにつれ段々とサイレンの音が近づいてくる。もしかするとそこから香ってきているのかもしれないが、それならそれで構わない。すでに対処されているはずだから、杞憂で終わるだけでしかない。しかしすぐ近くまでやってきたところで、僅かにその道が反れた。どうやら火事は男子寮の方で起きたらしいが、臭いは少し離れた裏路地から漂ってきている。

ふう、と一息吐いてから、氷室は慎重に路地裏へと足を踏み入れる。誰かが重傷を負っていたとしても、それを負わせた犯人がその場に未だとどまっている可能性もある。不用意に飛び込むのは危険だし、戦う必要があるのなら不意打ちの方が有利だ。

路地の角までやってきて、身を隠しつつその先を覗き込む。視線の先には少年一人とベンチに横たわる少女が一人。少女の方は外人らしく、身に纏う衣装も学生服とは異なる。かといって私服とも思えない。

（ここからじゃ判別しにくいけど……）

怪我をしているのはおそらく少女の方だろう。

少年の方は少女の傍で跪き、少女と何やら会話を交わしている。と、突如少年は少女の体を背負いこちらへと歩き始めた。

（この状況で？）

普通怪我をしている人間は下手に動かさない方がいい。その場に留まって救急車を呼ぶなり、人を呼んでくるなりするのが一般的な対応だ。ましてやすぐ近くに消防車が来ている状況で、わざわざ運ぶ必要はない。無論、一刻を争う自体なら往復の手間を惜しみ運ぶこともあるかもしれないが、少年の進む先はサイレンのする方向とは真逆の方角だ。

（怪しいわね……）

どうする、と自問し、

（なんて、考えるまでもないわね）
答えは出ていると、一気に物陰から飛び出した。

「止まりなさい！」

「っ——誰だ！」

道の中央に立ちふさがった氷室に対し、少年は警戒を露わにし身構える。

「——って、氷室？」

「上条、くん……？」

対面したことでハッキリとした人相に氷室は啞然とし、同時に心の中で盛大な舌打ちを漏らす。

（まさか今日だったとはね……）

おぼろげな原作知識を思い出し、現在の状況を悟る。

おそらく魔術師ステイル「マグヌスとの戦闘を終え、現場から逃げきたところなのだろう。」

（となると、この子がインデックス禁書目録……）

「なんでこんなところに……？」

「それはこっちのセリフよ」

「うつ……！」

夜更けに大怪我を負った少女を背負った少年と、夜遊びに耽っていた少女のどちらが異常かを問われれば、間違いなく上条側がおかしいと断言できる。

無論、夜遊びも褒められたものではないのも確かだが……。

「——って、こんなことしてる場合じゃないんだった。……悪い、氷室。今急いでんだ」

「でしょうね。その子、怪我してるみたいだし」

真っ白な布地に金の刺繍が施された高価なティーカップみたいな修道服を身に纏う少女を一瞥し、頷く。

血の臭いはそのシスター——インデックスから放たれたものだ。今現在も足元に血の雫が滴っていることから、傷を負ってからそう時

間は立っていないのだろう。

「ああ。だから——」

病院に、と続ける上条の言葉を遮り、

「ええ、だからその子をすぐにおろして」

「——え？ おろす？」

「いいから早く！」

「えっ……、あ、おい！ 氷室っ！」

状況を飲み込めていない上条を無視して、その背からインデックスをはぎ取ると地面にうつ伏せに寝かせ傷口を見る。

「酷いわね」

純白の布は背中の部分だけ真っ赤な血で染まり、黒く濁っている部分も見受けられる。

「そうなんだ。だから早くその子を病院に連れてかないと——」

「なら、なんでサイレンの鳴っているのは逆方向に向かっているの？」

あれだけの騒ぎなら救急車の一台や二台待機していてもおかしくない。

なのに、それをしないのはなぜか。

「そ、それは……」

「事情がありそうだけど、今はこの子を助けるのが最優先よ。少し黙ってて」

言い淀む上条にきっぱりと告げ、氷室は携帯を取り出すと短縮ボタンから目的の番号を呼び出す。

「……………私よ」短いコールの後、電話に応じた相手に開口一番そう告げると、「訳有りの重症患者一名。背後から鋭利な刃物で一撃。傷口は広くて深いけど中は無事みたい。でも出血が酷い。血液型は……」ちらりと上条に視線を向けるが、しきりに首を振る姿を見て、「御免、わからない。応急処置はこっちでしておくから急いで車を回して。場所は——うん、そう。じゃ、よろしく」

居場所を伝え、電話切ると再びインデックスへと視線を向ける。

「お、おい氷室。今のつて……」

「病院よ。当然じゃない」

「い、いや、それは不味いんだ。その子は……」

「IDを持たない“外の人間”でしょ？」

「なっ——！？」

なんで、と目を丸くする上条にインデックスの傷の具合をより深く診察しながら、

「この状況下で救急車も呼ばず、人がいる場所にもいかず、むしろ避けるように行動しているなら答えは一つよ」

あなたが犯人なら話は別だけど、と語る氷室に、上条は必死になつて首を振り否定する。

「でも、それなら……」

「大丈夫。呼んだのはそういう“訳有り”でも対応してくれる病院だから。上に知られるのが不味いつていうならその存在も隠してくれるところよ。だから安心して」

確かにそれならば問題はない。上条は当初、とある事情により担任教師の小萌先生の家へ向かうつもりだったが、きちんとした医療施設に搬送できるのならそつちで治療してもらった方がいいはずだ。

「てか、なんでそんな病院知ってるんだよ」

「親が務めてるところだから」

「お、親？」

「そう。……それより少し離れてて。止血するから」

「お、おう。何か手伝えることはあるか？」

「ないわ。むしろ邪魔。特にその『右手』がね」

「右手……？」

上条は自らの右手を見る。

その右手にはあらゆる『異能の力』を打ち消す力が備わっている。ついさっきまでその力を使い、インデックスを狙ってきた『魔術師』を自称する男と戦ってきたところだ。

（けど、それが止血とどう関係するんだ？ いや、それ以前に——）

なんで氷室はこの『右手』の事知っているんだ、と首を傾げる上条の目の前で、あるうことが氷室はその手をインデックスの傷口に押し込んだ。

「うつ——！？」

「お、おい！ 氷室！？」

「黙ってて！ 少し痛いけど、我慢してね。すぐに血を止めて病院に連れて行ってあげるから」

優しく諭すようにインデックスに告げると、氷室は再び視線を傷口へと向け、集中する。

（傷口の範囲は広いけどきれいに切られている。これなら止血して適切な処置を施せば傷跡も残らないわね）

心の中でそう呟きながら、意識を傷口全体に広げ、膜で覆うようなイメージを思い描く。

すると、

「……血が、止まった？」

「ええ。このまま維持してれば、病院までなら何とか持つわ」

「で、でもどうやって……」

氷室は上条と同じ『無能力者^{レベル0}』のはず。何の能力も持たない、持っていたとしても現実に効果を及ぼすほどの力など持たない、無能力な能力なはずだ。

「……私もね、上条君と同じよ。身体検査では検出されない能力者^{システムスキャン}」

「検出されない……？」

再び上条は自身の右手に目を落とす。

『幻想殺し』と呼ばれるその右手は、超能力であれ魔術であれ、それがたとえ神様の奇跡なんてシロモノであれ、一撃で打ち消す力を持つ。が、逆を言えばそれだけでしかない。拳銃から放たれた弾丸を防ぐことは出来ないし、燃え移った炎を消すこともできない。ましてや身体検査で用いられる機械には何の効果ももたらさないため、結果的に『無能力』の烙印を捺されるのだ。

「私の能力——『抑止力^{カウンターストップ}』はね、『止める』能力なの」

「とめる？」

「そう。正確には『対象の持つベクトルに干渉し、その量を0にする』能力。ベクトル量が0になった物体は動くことができないから、結果的に『停止』することになる」

しかしその力は“初めから動いているもの”に対してしか効果を発揮しないため、静止した状態からの動きを読み取る身体検査では計測されることはない。それどころか計測器の動きすら『止めて』しまつたために、値が0から動くことはなく計測不能となつてしまう。

故に結果は『無能力』判定。

「今はこの子の傷口の血を『止める』ことで血管に蓋をしている状態。だからもし上条君の右手が干渉すれば、その蓋は外れて再び出血が起きることになる」

だから邪魔なのだ。

その言葉に、上条は小さくうめいた。

自分の『右手』は異能の力を打ち消すことは出来ても、不良からは逃げるしかなく、テストの点上がる訳でもなく、女の子にモテたりする事もない。ましてや瀕死の少女を救う事すら出来はしない。

それに比べ氷室の能力は同じ『無能力』とされながらも、こうして少女の傷を塞ぎ、その命を繋ぎとめているのだ。応急処置とはいえ、それは確かにインデックスの事を救っている。今、まさに。

「卑下する必要はないわ。たまたま状況が合致しただけで、私の能力だつて“使えない”能力なんだから」

「使えない？」

なんで、と問いかける。今まさにインデックスの命を救っているのは氷室の能力によるものだ。それが“使えない”なんてもののはずがない。

「使えないわよ。ベクトル量を0にするって事は『止める』こと“しか”出来ないってことだもの。加速することも減速することもできない。何かを生み出すこともできないし、操ることも不可能。あらゆる攻撃を防ぐことは出来ても、攻撃力は皆無。そんな力、こん

な場面以外にどこで使えっていうのよ？」

確かに『物を止める』という力が役に立つ場面はそれほど存在しない。例えばブレーキの壊れた暴走トラックを止めるのに使えるが、そんな場面に出くわす方がレアで、そんな限定的な場面にしか使えないのでは意味が無い。あらゆる攻撃を止めるというのも、攻撃を仕掛けてくる者を排除することが出来ない以上、ただ防ぎ続けるだけで、相手があきらめるのを待っていることしかできない。先に力尽きてしまえばその時点で殺られてしまう、その程度の力ではない。

今だって、インデックスの命を繋ぎ止めてはいるが癒しているわけではない。あくまでも延命であり、それ以上の事は他の者の手に委ねるしかない。

「だから今回は偶然状況が私の能力に適していただけで、異なれば立場は逆転していたか、どちらも役立たずで終わっていたはずよ」

「あ、ああ……」

そういう事なら上条だって理解できる。

お互いたったひとつの事に特化しているせいで、それ以外の事がならできないというだけの事だ。

これがもし何らかの『異能の力』によってインデックスの命が脅か

カウンターストップ

イマジンプレイカー

されているのならば氷室の能力ではなく上条の右手の出番となったはず。

「それと、このことは誰にも言わないでね」

「え？　なんでだ？」

無能力者の形見は狭い。能力者の街であり、学校の評価もそれに準ずる以上、最底辺に位置する『無能力者』は他の能力者から見下される事が多い。

それに能力云々を除いたって、力あるものが力なきものを虐げるのはいつの世も変わらない事柄だ。

しかし氷室にはちゃんとした能力が備わっている。例えその力が“使えない”能力だとしても、能力者であるという事実があれば彼女

の地位は向上し過ぎやすくなるはずだ。

「必要ないから」

「必要ない？」

「だってそうでしょ？ スプーンを曲げるならペンチを使えば良いし火が欲しければ100円ライターで十分よ。テレパシーなんてなくてもケータイがあるし、レポートなんて使わなくても自分の足で歩けばいいだけじゃない」

「まあ、そうだな」

エレクトロマスター

それは昨夜、とある電気使いに上条自身が吐いた台詞でもある。

他の何かで十分代用可能ならば、わざわざ超能力を使うまでもない。ただ少し便利だな、程度のもので、その超能力だって1人1つしか持つことができないから自身の能力以外の事柄は、やはり何かで代用するしかない。

「普通に日常生活を送るだけなら超能力なんてものも必要ないのよ。だからそれで得られるものなんて『私は優秀なモルモットです』って評価だけよ」

バカバカしい、と吐き捨てる氷室に、上条は納得しながらもどこか薄ら寒いものを感じた。

『優秀なモルモット』。確かに違いない。ここは超能力を研究する街であり、生徒は『学生』の名を借りた超能力が使えるという『被^モ検体』だ。その能力が向上するということは即ち『より優秀なモルモット』になったと言える。

だがそれを言ってしまうと――、

今も必死になってレベルを上げようとしている多くの能力者達^{がくせい}の努力はどうなる？

『無能』の烙印を捺されて腐っていった者たちの嘆きはどうか？

そんなものに何の意味もないのだと、そういう事なのか？

「どいつもこいつも能力、能力……超能力がどれほどのものだっていうのよ。そんなものだけで人の価値が決まるわけじゃないでしょうに……」

なおも続く氷室の怨嗟。

そう、怨嗟だ。

それはまるで、過去にそういう扱いを受けたことがある様な、そんな過去に対する恨み辛みを吐き出すような言葉に、上条は氷室の中にある“何か”を垣間見た気がした。

上条にとっての氷室皐月という少女は、美人で、胸がでかくて、ノリのいい、物静かなクラスメイトだ。

普段は一人静かに教室の片隅で本を読むか窓の外を眺めているかのどちらかで、眼鏡をかけていればまさしく文学少女という言葉がぴたりと当てはまりそうだ。

かと思えば、今朝の一件のようにノリがよく、話してみれば決して悪い印象を抱くことはない。面倒見も良く、クラス委員長（女）と一緒に何かを手伝っている場面もよく目にする。

クラスのみならず学校中で密かな人気を博し、非公式にファンクラブまで発足しているという噂も耳にしたことがある。

見た目は文句なしの美人だし、スタイルもいい——特にその胸が。それでいて人柄もいいともなれば、多くの好感を集めるのは当然だろう。

頭もよくて勉強もでき、でも能力テストだけは最低得点のため補習の常連客。

それが上条がこれまでの抱いてきた氷室皐月というクラスメイトの人物像だ。

しかしそれは高校に入学してからのこと。中学は別の学校だったため、それ以前の彼女がどういう人物だったのかを上条は知らない。

だからそこに人には言えないような“何か”があつたとしてもなら不思議ではない。

だが同時に、今の氷室を見ているとそれを信じることは出来なかった。

およそ『無能力者^{レベル0}』であるということ以外に欠点なんて見当たらないこの少女が、これほどまでに悪感情を抱く“何か”があつたなど見当もつかない。

身勝手ながらに上条は、彼女は人を羨むことも恨むこともないのだとさえ思っていた。

けどそれは違つただと。彼女も一人の人間であり、ならば当然そういう暗い感情を宿すただの人なのだと、理解した。

（でも、なんで……）

怨嗟を綴る氷室の表情はどこまでも冷たく無表情で——感情無しには語れないと示しているかのようで——

それは彼女の抱える暗さがともまでも深く、底の知れない深淵の『闇』を連想させるほどに暗いものだと言ふように——

（なんでそんなに、悲しそうなんだよ……）

何故だか上条には、氷室が一人泣いているかのように見えた。

「上条君？」

ふと名を呼ばれ顔を上げると、氷室が不思議そうな表情で上条を見つめていた。

そこに先ほどの暗い冷たさは微塵も感じられない。いつも通りの氷室皐月がそこに存在し、先ほどののが全て夢だったかのような錯覚を覚えてしまう。

（夢、だったのか……？）

今日一日いろいろとあり過ぎたせいで疲れているのかもしれない。

「えっと…悪い。で、なんだっけか？」

「だから秘密にしといてくれて話よ」

「あ、ああ。でも、それなら尚更バラしちまった方がいいんじゃないか？」

氷室の過去に何があつたのかはわからないが、かといって『無能力^{レベル}者』であるより、無い方がやはり都合がいいのではないかと思う。

「まあ、普通有能力だったならそっちの方が面倒がないんでしょうけど……」

「何か問題があるのか？」

それはやはり“暗い過去”に関係するのだろうか、と上条は氷室の顔を窺ってみるも、眉を顰めてはいるものの先ほどの様な冷たい無表情ではなかった。

「問題、というか……希^{レア}少^{レア}なのよ、私の能力は」

「まあ、そうだろうな……」

上条だってすべての能力を知っているわけではないが、それでも『物を止める』だけの能力なんて聞いたことがない。逆ならば腐るほどあるのだが。

「勘違いしているみたいだから訂正するけど、『止める』ことが希少^{レア}なことじゃないからね」

「へ？ 違うのか？」

「ええ。問題なのはそれが『ベクトル』に干渉する能力だってこと『ベクトル……？ それのどこが問題なんだ？』」

物を止めるのならベクトルに関わるのは当然だろう。

物体は須らく何らかのベクトルを有しているのだし、動いているということはそのベクトルが作用しているという事だ。その作用を『止める』以上、ベクトルに関連するのは必然だと思っ^レのだが……。

「間接的にベクトルに作用する能力者は大勢いるわ。『^{サイコキネシスト}念動力者』もある意味そうだしね」

物体に力を加えて操る彼らも間接的にベクトルを操っていることに

なる。

「でも直接ベクトルに干渉できる能力者は私以外にはこの学園都市に一人しかいないの」

「二人だけっ！？ マジかよ」

「マジよ」

学園都市の人口は230万人とされ、その八割が学生^レ能力者だ。つまり184万人もの能力者がいて、その中のたった二人しか存在しない。

確かに希少^{レア}だ。

ちなみに『幻想殺^{イマジンプレイカー}し』はそれ以上の珍種^{レアモノ}のだが、本人に全くその自覚がないためここでは捨て置かれている。

「しかもその能力者っていうのが、第一位なのよねえ……」

「だ、第一位^{トップ}つて……、学園都市に7人しかいない『超能力者^{レベル5}』の第一位^{トップ}っ！？」

学園都市における能力者はその力量により0から5の6段階に振り分けられる。

最底辺は言うまでもなく上条達が所属する『無能力者^{レベル0}』。そこから一般的に能力者と呼ばれ始める『低能力者^{レベル1}』『異能力者^{レベル2}』と続き、『強能力者^{レベル3}』で一人前、『大能力者^{レベル4}』ともなればエリートと認められる存在となる。

そして最高位の『超能力者^{レベル5}』は学園都市に僅か7人しかいない。その7人の中でもさらにランクがあり、その第一位^{トップ}ともなれば正真正銘学園都市最強の能力者ということになる。

「そ…、だからわかるでしょ？ 最強^{第1位}の能力者と同じ系統の能力を、最弱^{レベル0}である私が持っているなんて知れたら大騒ぎになるわ」

騒ぎにならないはずがない。大事だ。

「私は今の生活で十分満足しているの。それ以上もそれ以下も望んでいないから……」

「……わかった。誰にも言わない」

「助かるわ」

確かにすごいことであり、自慢できることではあるが、それをどうするかは本人次第だ。他人が持て囃したところで碌なことにはならない。

そもそも話したところで信じる者などいないだろう。氷室が『無能力者』であることはすでに『書庫』にも登録されている事実だ。その力が『身体検査』で検出されない以上、上条の『幻想殺し』同様、その評価が覆ることはない。

だが万が一、ということもある。

本人がそれを望まないのであれば、上条には面白半分でそれを風潮する気は微塵もなかった。

「……着たみたいね」

未だ鳴り止まない男子寮側のサイレンとは別の方角から聞こえてきたサイレンが近くで止まる。

すぐさまストレッチャーを連れた一団がこちらに向けて駆け込んできた。

「運ぶの手伝って」

「おう……って、大丈夫なのか？」

「直接効果範囲に触れなければ平気よ」

「わかった」

チラリと見たインデックスの容態はすでに虫の息だ。

ここからは時間との勝負となる。

「もうすぐ病院だからな。それまで死ぬんじゃないぞ、インデックス」

冷たくなったインデックスの手を上条当麻は力強く握りしめた。

第二章 とある介入者の即興演出へインプロビゼーション

「妻の初産を待つ夫か、あんたは……」

インデックスが手術室の中に消えてからというもの、無意味に廊下を行ったり来たりする上条の様子に氷室はあきれたように声をかける。

「ちょっとは落ち着いたら？ ああ傷なら手術を受ければ問題ないはずよ」

「いや、わかつてはいるんだけど……」

それでもじつとはしていられないと、立ち止まりはすれどソワソワと手術室のドアへとしきりに視線を向ける上条。

「はあ……」

気持ちとは分からなくもないが、いくらなんでも心配のし過ぎだ。

「こんなところで心配したってすでに債は投げられた後よ。上条君が執刀するわけでもないのだから、私たちに出来ることなど何一つないの」

そう割り切ったことが言えるは単に氷室がドライなだけか、それとも他人事だと思っっているからなのか。もしくは――

「大丈夫。さっきの医者はこの学園都市で最高の医師よ。彼に救えない患者は誰にも救えない。だから安心して黙って座ってなさい」

「最高の、医師……？」

上条はインデックスとともに手術室に消えていった医者顔を思い出す。

失礼ながら、なんていうか潰れたカエルみたいな顔をしている初老の男性で、とてもじゃないが彼が最高の医師だなんて上条には思えない。

ましてやここは学園都市。最先端科学の結集するこの街において最高とは、即ち世界一の名医ということになる。

「……あれが？」

「ええ」

「いやいやいや。どう見ても上条さんの見立てでは田舎の小さな診療所で御老人相手に世間話ついでに診察を行っている方がよく似合っているといった感じなんですが？」

「だとすればずいぶんとハイカラな田舎よね、ここ」

「ハイカラって……いつの時代の言葉だよ、それ」

「明治の後期から戦後にかけてね。でも今でもキッチンと辞書に載っている列記とした現代語よ」

「いや、それはわかってるけど……、てか、マジでそうなのか？」

「ええ。疑う気持ちもわからなくないけど紛れもなくそうよ」

自信満々に頷く氷室からの様子に嘘をついている気配はない。

が、だからと言ってすでに「田舎の小さな診療所で御老人相手に世間話ついでに診察を行っている町医者」という認識が出来上がってしまったている上条には、どうにも信じがたい。

「……上条君。冷凍催眠コールドスリープって知ってる？」

「それってあれだろ？ 人間を氷漬けにして、後で解凍して蘇えらせるって言うヤツ。たしか有人での惑星間移動時に無駄に歳を取らないようにするための技術、だっけか？」

「ええ、不治の病とか死者蘇生の望みを繋ぐとかの理由で医療現場でも用いられることもあるらしいけどね」

「けどアレってたしか、冷凍する時に問題があって現実には不可能とか言われてなかったか？」

「そうよ。人体の6割から7割は水分で構築されているけど、『水』は他の物質と違って液体よりも固体の方が体積が大きくなる特殊な物質だから、冷凍時に細胞内の水が体積膨張を起こして細胞壁を壊してしまうの。だから解凍してもほとんどの細胞が死滅しているから、蘇生は不可能とされているわね」

「だよなあ……。で、それがどうしたんだよ」

少なくとも今のインデックスにそんな処置を施す必要などない。というか、蘇生が不可能ならそれはただの『人殺し』だ。他にどうし

ようもなく、助かるかもしれないもしもの未来に一縷の望みを託すより他にない状況ならばともかく、それがいつになるのか、そもそも本当にそんな日が訪れるのかもわからないのに実行するヤツの気がしれない。

「あの医師はね、その不可能を可能にしたの。それもほとんど後遺症らしい後遺症を残すことなく、ね」

「なっ——、マジかよっ！　どうやって！」

「奇跡的に体積膨張が起きてなかったからね。　　なら後は解凍するだけだったから大した問題^{こと}ではなかったよ」

そう答えたのは氷室ではなく、手術室の中から姿を現した力エル顔の医師。

「先生！？　インデックスは！　手術はどうなったんですか！？」

彼の顔を見るや否や飛びつくように上条が詰め寄る。

「安心していい。手術は成功。ただ失血が酷いからね。一、三日は絶対安静だよ」

「よかったあー」

「言っただでしょ、大丈夫だって」

はぁ、と安堵の息を漏らし胸を撫で下ろす上条の姿に、笑みを噛み殺しながら氷室はその肩をそっと叩く。

「……にしても、よく言うわね。『解凍するだけだったから大した問題ではない』なんて言えるの、あなたぐらいでしょうに」

「そうかい？　確かに解凍時にも問題はあるけど、その問題さえ分かっているのなら“それに適した解決策”を用意して対応すればいいだけの話だ」

「その解決策がぶっ飛んでるっていうのよ……」

人の体は種類の異なる無数の細胞で構築されているため、熱の伝わり方が場所によってそれぞれ異なる。そのため均一に熱を加えただ

けでは解凍する速度にムラができ、例え正常に解凍できたとしても人体の機能に多くの問題を抱えた状態となってしまう可能性が高いのだ。

それをこの医師は、熱の伝導率毎に分けて解凍するという方法を取った。

要するに氷漬けの人体をバラして、解かして、再度繋ぎ合わせたのだ。

しかも後遺症を残さないために各部の解凍速度を調節し、手術の進捗と併せるという荒業までやってのけている。

もしこの話を普通の医者が聞けば、まず信じないか、信じたとしても目を丸くして言葉を失うか、泡を食って倒れるかの何れかだろう。一般人ならまず正気を疑う凶行だ。

だが、どんな凶行であろうともそれで患者の命を救えるのであれば彼は何を犠牲にしてもそれを実行する。

法も、常識も、倫理も、道徳も、慣例も、その全てを無視し、一切の手段を問わず、ただ一つの目的と信念のために行動する。

患者を見捨てない。

医者としてごく当たり前の、しかし現実的には非常に難しい、ただそれだけのためだけに行動し、実行し、達成する。

それが彼にとつての“当たり前”であり、それが出来なければ彼は自分に『医者』を名乗る資格はないとさえ考えている。

どこまで行っても彼は医者であり、どんな時でも医者であり、どうなるうとも医者であり続ける。

そうしてこれまで多くの患者の命を救いだし、奇跡を起こしてきた。それによりついた二つ名が『ヘブンキャンセラー冥土帰し』。奇跡の医師。

もっともその名の通りに死者を甦らせるなんてことはさすがの彼でも不可能だ。

先の冷凍催眠の例は、ただ氷漬けになって眠っているだけだったか

ら可能だっただけで、もし冷凍された際に細胞壁が壊れていたのなら、さすがの彼も手の施しようがなかった筈だ。

しかし“死んでさえいなければ”彼は必ず患者を救い上げる。どんな手段を用いても。

それが彼という人間の存在意義だから。

「それはそうと、一つ聞いてもいいかい？」

「あ、はい。なんですか？」

喜びを噛みしめていた上条に『冥土帰し』^{ヘンキヤンセラ}が自身の喉元を指さしながら問いかける。

「あの子のここ、喉の奥の方に、なんだかよくわからないマークが刻まれていたんだけどね。君、何か知っているかい？」

「マーク？」

「そう。ちょうど星占いとかで使われているような、そんな形の印だよ。直接じゃなく、何らかの能力みたいなもので付けられているみたいんだけどね。よくわからなかったし、とりあえずは問題なさそうだったから放置しているんだけど……その様子だと何も知らなそうだね」

「はい……」

「わかった。一応こつちでも検査はしてみるよ。けど彼女、シスターみたいだから、何か宗教的な意味があって付けているのかもしれないけどね？」

「……………」

「じゃ、僕はまだやることあるから、これで失礼するよ」

そう言つて『冥土帰し』^{ヘンキヤンセラ}は踵を返そうとし、突如忘れ物でもしたかのように足を止めると「あ、そうそう」と言いながら氷室へと向き直る。

「君もあまり無茶はしないようにね？」

「……………わかってるわ」

「ならいいんだけどね？」

それだけ告げると今度こそ『冥土帰し』^{ヘンキャンセラー}は手術室の中へと戻っていた。

「……知らないけど、心当たりはある、って感じね」

『冥土帰し』^{ヘンキャンセラー}の姿が見えなくなると同時に物思いにふけていた上条に、氷室が声をかける。

「あ、いや……」

「ウソ。おおよそあの子を襲った犯人に関連する事でしょ？ で、巻き込みたくないから話さない、ってどこかしら？」

「……すげえな。なんでこれだけの情報でそこまでわかんだよ」

（そりゃ、原作^{みらい}を知ってますから）

感心する上条の問いに氷室は心の中で答えを返す。

無論、口に出すことはしない。出したところで信じてもらえないだろうし、何より氷室の持つ原作知識は完璧ではない。

元々原作が未完だったというのもあるが、色々記憶から抜け落ちている知識^{ストーリー}が結構ある。

例えば今日が上条とインデックスの出会いの日であり、原作の開始日だったなどすっかり忘れていた。

夏休み初日という分かりやすい日であるにもかかわらず、氷室は覚えていなかった。

よって自信を持って言えるのはせいぜい主要人物のプロフィールとあらすじ、それとおおよその時系列程度だ。^{アウトライン}

それ以外はこれから読み取れる事象を氷室が独自に推測し、補間しているに過ぎない。

しかしそれでは不確定要素が多すぎるため確証に欠け、他人に伝えるなんてことできる筈もない。

それにすでに原作への介入を果たしてしまっている現状、それらの知識は参考程度にしか役に立たないだろう。

なんせ『氷室皐月』なる人物がすでに原作には登場しない『不確定^{イレギ}ユラー

要素』なのだから。

（問題は、できるだけ原作の流れを崩さずに、どこまで都合のいい^{ハッピーエンド}結末を紡ぎだせるかね）

元々氷室は原作に介入する気などなかった。

それは最初から無理だと理解はしていたが、少なくとも今回の一件に関しては自分の出る幕ではないと判断していた。

しかしあの場であれ以外の行動をとる方が逆に不自然だ。自分にはその状況を解決できる術と人脈を持ち、それでいて何もしないなんてことできる筈がない。

それに個人的な心情で、インデックスを見捨てることができなかつたというのもある。

無論、見捨てたとしてもそれならそれで原作通りに進んだかもしれない。

だが、そうならなかつたかもしれない。

あの僅かな邂逅が、後の展開にバタフライ効果を及ぼさないとは限らないのだから。

なら関わったことを悔やむより、物語が破綻させてしまった責任を果たすべきだ。

介入を続け、流れを修正し、見届ける義務が氷室にはある。でなければ最悪の結末を迎える可能性もありうるから。^{バッドエンド}

だからと言って原作通りに進めるつもりはない。それはすでに破綻しているし、あの物語も万事解決とは呼べる代物ではない。^{ハッピーエンド}

しかし原作から離れすぎても今後の展開が読めずアドバンテージを失うことになる。

それになんだかんだ言っても原作の終わり方が最善であることも多い。

だがそこへ至る経緯が欠落している以上、慎重に事を進める必要がある。

原作と現在の情報のすり合わせをし、どこでどれだけの情報を開示し、どれほどの介入をして、どれだけの修正と破綻を行えばいいのか。

それは単に原作を^{台本}なぞるよりも難易度の高い『即興劇』だ。

始まりと終わり方だけが決まっていて、後は演じる役者たちに全てが委ねられている。

しかし彼らは自分達が『即興劇』を演じているという自覚がない。だからそれぞれがそれぞれの思惑に従い、思うがままの行動をとり続ける。

そんな状況で氷室が果たすべき役割は役者兼演出家だ。

自覚なき役者たちの意図をくみ取り、先読みし、物語が破綻しないよう調整し、テコ^{介入}入れをし、最良の結末へとこじつける。

それも決して自らが^{デウス・エクス・マキナ}都合主義の神様にはならずハッピーエンドに、その場にいる者たちが自然とそちらへと向かってような、そんな演出を誰にも悟られず、極自然にこなしていかなければならない。

（どんな苦行よ、それ……）

目の前にそびえ立つ壁の高さを思うとくらくと眩暈を覚えるが、偶然とはいえずでデウス・エクス・マキナに後戻りのきかない場所に立ってしまっている以上、やるしかない。

すでに債は投げられている。匙まで投げるわけにはいかない。

（とりあえずはこの先の展開へと介入する糸口、これを本格的に繋ぎ合わせるのが先決ね）

上条当麻は無関係な人間が関わるのをよくは思わない。できる限り遠ざけようとするだろうし、それが女の子であるならばなおさらだ。朴念仁で無鉄砲で、後先考えない唐変木ではあるが、同時に生粋のフェミニリストでもある。後、無類のお人よし。

しかし頑固というわけでもない。理屈があれば理解はするし、流されやすく、人の話を鵜呑みにしやすいという欠点もある。

（となれば――）

数瞬の思考でとりあえずの道筋を立てた氷室は上条を真正面に捉え見つめる。

「……話して。何が起きているのか、あの子が誰に狙われているのか」

「いや、それはダメだ」

案の定、即座に首を振る上条。

「インデックスを助けてもらったには感謝してる。でも、だからこそ、これ以上氷室を巻き込むことは出来ない」

どこまでも真摯に、率直に、当たり前前の言葉で申し出を拒否する上条当麻。

しかしそんなことは織り込み済みだ。

「勘違いしないで。別に進んで巻き込まれたいわけじゃないわ」

「だったら――」

「けど、嫌が応でもすでに巻き込まれている状態なの。言わなかった？　ここは親が務めている病院だって」

「……そっぴゃ、そんなことも言ってたっけ」

「ちなみにさっきの医者がその親なんだけど……」

「……………はあ？」

長い長い沈黙の後、シリラスも何もかもをぶっ飛ばして、上条当麻は間抜けな顔を晒した。

「……………あれが、親？」

「そっぴゃ」

「……………冗談？」

「じゃないわよ」

「……………マジで、親？」

「そっぴゃ言ってるでしょ」

「……………奇跡だ」

これぞまさに遺伝子の神秘。奇跡が起きたとしか思えない程、上条の目から見て二人は似てない。

似ている方を探すのが困難なぐらい似ていない。逆間違い探し、それも世界最高難易度を誇る超難問と呼べるくらいに全く以て似ても似つかない。

「言っておくけど、血は一滴も繋がってないわよ」

「ってことは、連れ子か？」

「いいえ、『捨て子』よ」

「捨て——、っ!？」

チャイルドエラー
「『置き去り』だから、私」

「——、!？」

今度こそハッキリと上条は絶句した。

チャイルドエラー
『置き去り』とは学園都市が抱える特有の社会現象のことだ。

学園都市は入学した生徒の生活を最低限保証する制度が存在する。

これは入学と同時に『開発』を受け『能力者』となることで、その存在そのものが学園都市の機密情報と化した生徒をむやみに外部に流出させないようにするための機密措置の一環として存在する制度だが、これにより学生たちは学園都市内の生活が保証されることとなる。

しかしこれを悪用し、手を付けられない子や育児を放棄した親が、入学金だけを支払って我が子を学園都市に放り込んだのち行方を眩ますという行為が頻発するようになった。

これに対し、学園都市側は入学時の審査を厳しくする等の措置を取ってはいるものの、大した効果はなく、かといって入学手続きそのものが正当に行われている以上、入学と同時に能力開発を行ってしまい、以後その子を外部へと放り出すこともできなくなってしまう。その上、何の保証もせずにいると治安の悪化を招くだけのため、保

証はせざるを得ず、それに託ける無責任な親は後を絶たない。そのため有効な手段がとれぬまま年々その数は増え続けているという、厄介な連鎖が発生しているのだ。

そうして親に捨てられた子供の事を学園都市では『置き去り』チャイルドエラーと呼んでいる。

「驚くことじゃないと思うけど？ 学園都市^{じゅん}じゃないして珍しくもないんだし」

「いや、それはそうだけど……」

確かに珍しくはない。年々増加傾向にある『置き去り』チャイルドエラーが具体的にどれだけいるかなど上条にはわからない。だがけて少なくともこれとは知っている。

それに学園都市は外部の人間が立ち入るのを嫌っているため、親兄弟であつても中に入るには面倒な手続きと検査を幾重にも行わなければならず、頻繁に訪ねてくることはないし、外との連絡だつてある程度の規制が設けられている。

そのため本人が『置き去り』そうだと言わない限り他の学生と何一つ変わらない生活を送っているため、区別をつけることはできない。

だから偶然となり居合わせた子が『置き去り』そうだつたとしてもなら不思議ではない。

だがしかし、自分から『置き去り』そうだという者は珍しく、普通は隠すものだ。親に捨てられたなんてこと、他人に話したがるヤツはそうはいない。

しかも目の前にいる人気者の少女が『置き去り』チャイルドエラーだなんて、上条じやなくても信じられないに違いない。

「少し前に大怪我を負ったことがあつてね。その時、執刀してくれたのが彼で、その誼で保護責任者を買って出てくれたのよ」

「だから、『親』か……」

「そう」

氷室は一度だつて『父』や『母』という言葉は使っていない。ただ

の『親』、それだけ。

それは父でも母でもなく、どちらでもあり、どちらでもない、自らを庇護する存在としての意味であり、それ以上の意味を持たない言葉だ。

だがそれでも『保護責任者』ではなく『親』という言葉を使うのは、その人物に敬意と感謝の気持ちを払っているから。

「だから、ここが戦いの場になるのなら、それは他人事じゃないの。……犯人、まだ捕まっていなくてしょ？」

「ああ……」

インデックスを襲ってきた——本人曰く、傷つけたのは別の人間で、自分はただ『回収』しに來ただけだと言っていたが——魔術師は上条の一撃で気を失い倒れたものの、それだけで諦めるとは到底思えない。

かといって警備員にそう易々と捕まるようなヤツでもおそらくはない。ジャッジメント

ならまたあの魔術師はインデックスを狙って襲撃を仕掛けてくる。対策を練ったうえで、必ず。

「けどさつきも聞いた通り、あの子は二、三日ここから動くことができない状態よ。でも襲撃犯がそれを悠長に待ってくれるとは限らない。なら、ここは戦場になるわ。そしてこの病院とその患者に危害が加えられるのなら、私はそれを黙って見過ごすことはできない」

ここは病院だ。それなりの警備は配備されているものの、あくまでも“それなり”であり、一般的な犯罪を想定したものでしかない。

そもそも病院が襲われるなんてことはそうそうありえず、ましてや魔導師なんてふざけた連中が襲ってくるなど言うまでもなく予想外の事態だから、大した効果は期待できないと思ってい

い。その上、ここにはインデックス以外にも多くに入院患者が在籍し、彼らの面倒を見るため常時医師や看護婦などが詰めている。

そこが戦場になるということは、つまりそんな彼らにも危害が及ぶ危険性があるという事だ。

（くそっ、やっぱり病院は不味かったか……）

かといって当初の予定通り、小萌先生に頼っても結局のところ同じだ。どの道、無関係な誰かを巻き込むことになるのは変わらない。（だったら、どうすればよかったっていうんだよ！）

インデックスを見捨てて逃げればよかったのか？

そんなことはできない。できたのであれば上条当麻は魔術師なんてメルヘン野郎に挑みかかりはしなかった。

なら今すぐインデックスを連れて逃げればいいのか？

しかし途中で容体が悪化した場合、またここに戻って来らざるを得なくなる。

だけどこのままここに置いておいても、無関係な誰かを巻き込んでしまう。

「大丈夫よ。こと防御に関してなら私の能力は完璧だから」

「……どうということだ？」

「こういうことよ」

そういうと氷室は持っていた空き缶を上条に向けて放り投げた。

上条は思わずとっさにそれを受け止めようと前に出る。

——が、予測していた場所に空き缶は“落ちてこず”、勢い余って前のめりに倒れ、

「あだっ——！？」

空き缶に盛大に頭をぶつけてしまう。

「大丈夫？」

「大丈夫って——狙ってやがっただろ、絶対！」

「そんなつもりはなかったんだけどね……さすがカミヤン。不幸には定評があるわね」

「いらねーよ、そんな定評！」

しかし上条当麻が不幸に見舞われるのは、物を投げれば地面に落ちるぐらいに当然の事なのである。

（――物を投げれば地面に落ちるのが、当然？）

それは何の不思議もない事なのだが、ふと疑問に思い、上条は視線を上へと向けてみる。

そこにはさつき受け止め損なった空き缶の姿。当然そこは空中で、何もなく、“普通なら”空き缶は床へと落ちる筈だ。

宙に浮かんだ空き缶を試しに左手で触れてみる――が、ピクリとも動かない。

（――これ、空中で『止まってる』んだ）

掴んで引つ張ったり、逆に押したり、握りつぶそうとしてみるもビクともしない。空中で完全に固定されている。

だが上条が『右手』で触れた瞬間、カランという甲高い音を立てあつけないほどに空き缶は床へと落下した。

つまりそこには『異能の力』――氷室の『抑止力』カウンターストップが働いていたという証だ。

「どう？」

「どうって……」

氷室は空き缶をただ投げただけ。投げた時点で空き缶は『停止』していなかったのだから、上条に向けて飛んできた。

しかし上条が取ろうとした段階で空き缶は空中に『停止』し、その結果目測を“誤らされた”上条が不幸な目にあつた。

「……つまり、氷室の能力は手で直接触れたりしなくても物を止めることができるってことか？」

「ええ。対象の位置座標さえ分かれば可能よ。ま、あの子の時は傷が深かったから手を入れて正確な位置情報を掴む必要があっただけ、基本的には目視の利く範囲なら可能ね。それに一度止めてしまえば能力を行使している限りどんなに力を籠めてもそれを動かすことはできなくなる。これを壁や床、扉なんかにかけたらどうなると思う？」

その壁や床、扉は動かすことができなくなる。

動かない、ということは外からどんなに力を加えても動かすことができないという事だ。

「そ。それ以上に壊すことすら不可能になるわね。私の能力はあらゆるベクトルを対象とできるから、分子、原子単位での『停止』も可能よ。それらが動かないのなら、それらで構築された物体を壊せるはずがない」

「すげえ……」

硬度を上げるなんてレベルじゃない。破壊不能な物体を作り出すなんてこと、他のどんな能力にも不可能だ。

「ってことは、それを使えば病室をシエルターみたいにできるってことか」

「そ。たとえば核爆弾を落とされようとも、巨大隕石が降ってこようともしないわね」

「いや、さすがにあいつらもそこまでではないと思うけど……」

「それに11次元ベクトルも止められるから空間移動テレポートによる侵入も防げるわ。『難攻不落』ですら生温い、まさしく『絶対不屈』の要塞よ」

「……確かに、それなら守りきれるかもな」

「でも私の体力は無限には続かないから……」

「ただ閉じこもっているだけじゃ根本的な解決にはならない、ってことか」

「そういうこと。だから無駄な力を使わないために、向こうがどんな力を使ってくるのか知っておきたいの。それにあの子がどんな事件に巻き込まれているのかを知れば、戦闘を回避する手段を講じることもしられるかもしれないし、できなくても何らかの対策は練れるはずよ」

今、インデックスをこの病院から動かすことはできない。

かといって上条一人で病院や入院患者たちも含めて全部を守りきるなんてことは不可能だ。

イマジンブレイカー
上条当麻の力は防衛戦には向かない。

『幻想殺し』の効果範囲は右手、それも手首から先の部分だけだ。その部分に触れた異能は須らく打ち消すことができるが、それ以外の場所は何の効果も持たない、ごく普通の高校生の肉体があるだけだ。

だから自分一人を守るのならなんとかなるかも知れないが、その背に誰かを背負って守る盾とするにはあまりにも小さすぎると言わざるを得ない。

カウンターストップ
一方で氷室の能力は彼女の言うとおり防衛戦に特化している。

破壊不可能、侵入不可能な『絶対不屈』の砦を築き、一切敵を近づけさせない。

しかしその砦も永遠に機能し続けるわけではない。
ならば――

「手を組みましょう、って言うてるの。私はこの病院とあの子を含めた患者たちを守るための盾となる。上条君はあの子を守るために盾に阻まれ動きを止めた彼らを排除する矛となる。互いの利害が一致した理想的な布陣だと思うけど？」

「ダメだ――、と言っても氷室は退かないんだろ？」

「当然」

上条がインデックスを守りたいと思うように、氷室にも守りたいものが存在する。それを守るためなら、絶対に退くことはできない。退けば守りたいものを守れなくなるから。

そして両者の願いが重なり合うのであれば、協力した方が成功率は高くなる。

あらゆる異能を打ち消す『幻想殺し』と、あらゆる攻撃を防ぐ『抑止力』。この2つが揃えば、魔術師相手でも十分やりあえる。

「……わかった」

どの道、魔術師マジックも一人ではないようだし、自分一人で全てを背負えるほど上条当麻は偉くも強くもない。

協力者となってくれる者がいるのであれば、これほど心強いことは

ない。

「話すよ……と言っても、俺の知っていることなんてたかが知れているし、正直俺自身も信じられないようなことばかりなんだが……」
「構わないわ。それならそれで、そこから推測していけばいいだけだから」

「そうだな。氷室は俺と違って頭はいいんだし」

上条一人では見ることの出来ないところも見えてくるかもしれない。

「あら、頭だけじゃなくて顔もいいでしょ？」

「……普通自分で言うか、それ？」

「上条君がブス専だとは知らなかったわ」

「なんでそうなるっ！」

「違うの？」

「違うっ！」

「残念」

「何がっ！？ 違くなかったらどうなってたんだ俺！？」

「中学時代のゴリマッチョなクラスメート（女？）を紹介しようかと……」

「全力でお断りさせていただきますっ！？」

第三章 とある幕間の休息时间へブレイクタイム（前書き）

今回はちよつと短めで内容薄し。

次回から本格的に事件に踏み込んでいくつもりです。

……三話目にしてタイトル付けに難航中orz

第三章 とある幕間の休息时间へブレイクタイム

「要約すると、あの子——インデックスはイギリス清教のシスターで、10万3000冊もの魔導書の内容を記憶していて、それを狙った魔術師とやりに追われていると」

「ああ、ステイルとかいう赤髪の外国人だ。他にもカンザキって言うヤツもいるらしい。そっちがインデックスを斬ったみたいだけだな」

「で、本来ならあの子の来ていた修道服——『歩く教会』の絶対防御であらゆる攻撃を防げたはずなんだけど、上条君が幼女の裸を見たいがために壊しちゃって、それを知らずに向こうは思いつきり斬り付けちゃったものだから、瀕死の重傷を負うことになった、と」

「そうだ————って、違えええ！」

思わずうなずいてしまった上条が、真っ赤になって否定の雄叫びを上げる。

「誰が裸を見たいがためだ！俺はそんなこと思ってない！あれはアイツが俺の右手の事をバカにして信じなかったからで——っ！」

「でも、見たんでしょ、裸」

「うっ……」

「見ちゃったんでしょ、裸」

「……………」

「無垢で敬虔な修道少女シスターの裸、見ちゃったんだよね？」

「……………」

「……上条君の変態」

「だああ——、そうさそうだよそうですよ、上条さんはバッチリインデックスさんの裸見ちゃいましたよ、わるかったですね！氷室さんはそんなに俺を貶めて楽しいですかこんちくしょうっ！」

「うん、ものすごく」

「いい笑顔で認めたしっ！」

不幸だ、と頭を抱える上条にサムズアップしながら微笑む氷室。
話の内容は割とシリアスなはずなのに、そんな気配を微塵も見せないや取りが真っ暗な待合室で繰り広げられていた。

一度集中治療室に移ったインデックスを見舞った後、改めて行われた情報交換——と言っても上条側からの一方的な事情説明だが——は、往々にしてこんな感じで進んでいた。

ちなみに夜の病院でこれだけの大騒ぎをしていれば看護師が鬼の形相ですつ飛んでくるはずなのだが、未だ訪れる気配はない。

理由は氷室がこっそり『抑止力』カウンターストップで即席の制音壁を周囲に築いているからだ。

一定量以上の音波に対し『停止』を行うよう演算式を調節することで、どんなに騒いでも小声で話している程度の音量しか周囲には漏れ出ない空間を構築しているのだ。

見た目に反し、かなりの高等技術をサラッと使っている氷室だが、正直こんな事に能力を使うよりも声量を抑えて話すよう気を付ければいいだけで、能力の無駄遣いもいいところである。

「まあ、上条君のラッキースケベは今に始まったことじゃないし……てか、上条君ってそれだけは不幸が適用されないのよねえ」

原作でもたびたび女性陣の風呂を覗いたり、着替え途中に乱入したりと事欠かなかった気がする。

「いえ、常にその後とてつもない不幸が待ってるんですが……」

「それは自業自得。ラッキースケベとでプラマイゼロでしょ？」

「いや、絶対マイナスだと思う……」

頭を抱えたまま蹲る上条を冷めた視線で見下ろしながら、氷室は「ふむ……」と腕を組む。

「それにしても『魔術』、ね……」

「……まあ、信じられないのも無理はないと思うけどな」

上条だって未だに信じ切れていない。

いや、その右手に『イマジンブレイカー幻想殺し』なんてものがなければ、絶対に信じなかっただろう。

科学万能のこの時代、しかもその最先端に位置するここ学園都市で、そんなオカルトの最たる存在を信じろというのが無理な話――、の
はずなのだが、

「なんで？」

「……へ？」

「だって魔術でしょ？」

「だって魔術だぞ？」

「うん。信じてない道理はないと思うけど？」

「いやいやいや、普通信じないだろ！ どう考えたってオカルトだぞ！？」

「そうね」

サラリと上条の固定概念を真つ向から否定する氷室の態度は至極自然体だ。何の気負いも見られず、至つて『当然』といった感じた。

「前に言わなかったっけ？ オカルトを証明するのが科学だって」
そつえばそんなことを言っていた気がすると、芋蔓式に思い出した制裁の記憶に顔を青ざめながらも上条は頷く。

「確かに魔術はオカルトよ。少なくとも多くの人間がそう思っている。でも、だからと言って『存在しない』と決まったわけじゃないわ。もし魔術がオカルトと呼ばれているのであれば、それは未だ科学のメスが入っていないか、もしくは証明に至るだけの検証が十分なされていないだけ。第一、超能力だって一昔前までは立派なオカルトだったじゃない」

「まあ、言われてみればそうなんだけどさ……」

「そもそも科学の基盤となったのは中世に流行った錬金術よ？ あれも魔術の一環としてみれば、科学は魔術から派生したとも言えるものなもの」

「うーん……」

確かにその通りではあるのだが、だからと言って「はいそうですか」

とは中々割り切れるものではない。

科学と魔術は別物という概念が定着している上条にとって、理解はできて納得まではいかない事柄だ。

それをさも当然のように受け入れ、認めている氷室に上条は感心する。自分だったらそう簡単には納得できない。というか納得できなかったせいで某シスターをひん剥く結果となってしまったわけで…

…

もつとも、氷室にしてみればその事実を初めから知っている上に、この世界自体がすでにフィクションの産物だという認識があるため、大抵の非常識オカルトは許容範囲なってしまうというだけの話なのだが。

「ともかく、これ以上はあの子が目覚めるの待つしかないわね。情報量が少なすぎて、現段階じゃなんとも言えないわ」

「えっと、すまん……」

「上条君のせいじゃないでしょう？ 多分あの子も上条君の事、巻き込みたくないと思ってたからわざと突っ込んだ話はしなかったんだろうし……」

「そう、だよな……」

——私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？

今朝インデックスと別れた際、彼女にそう問われ、上条は答えに窮した。

思えばその時からわかっていたはずだ。

インデックス
彼女が今、その地獄の淵に立っている、なんてことぐらい。

そしてその手を取らず、夏休みの補習日常を選択したのは上条だ。

置き忘れていったフードに気付いていながらも、探して届けようとせず「そのうち取りに戻って来るだろ」なんて安易な考えで放置していたのも上条だ。

その考え通り、取りに戻ってきたせいでインデックスが斬られた。これも上条のせいだ。なんせ彼女を守っていた修道服歩く教会を壊したのは他ならぬ上条だからだ。

つまり、全て上条当麻が巻き起こした『不幸』だ。

その『不幸』に一人の少女インデックスを巻き込んでしまった——ただそれだけのこと。

「——っ」

ギリリと齒を食いしばり拳を固く握る上条に、氷室はそつとため息を吐く。

彼は自らを責めているようだが、決して彼が悪いわけではない。

ただ本当に偶然に偶然が重なり『不幸』な結果が招かれたただけだ。

けど——、

（その『不幸』もアナタの仕組んだシナリオなのかしらね？）

そつと窓の外へと目を向ける。

煌めく夜の建物達の向こうに見える『窓のないビル』。

そこに居るとされるとある人物。

「……氷室？」

「え……あ、なに？」

「いや、なんか怖い顔して外を睨んでたけど、何かあったのか？」

「……なんでもないわ。それより上条君、これからどうするの？」

「どうって、そりゃ……」

インデックスを守る。それはもう決めたことだ。少なくとも彼女の身の安全が図れるまでは、上条当麻は逃げ出すつもりはない。

「そうじゃなくて、今夜はどこに泊まるのかって話。さすがに寮には帰れないでしょ？」

「あ……」

確かにそうだ。今や正体不明の火事——あのスタイルとかいう魔術

師の仕業だ——により、消防車や警備員がこつた返している所だ。
しかもちようど上条の部屋の前が出火場所のため、帰ればいろいろ
と事情聴取に駆り出されそうである。

第一、一度襲撃を受けた場所にこのこと戻るほど上条はバカではないし神経も図太くはない。

だがそうなると一転して、今度は上条当麻の行き場がなくなってしまう。何せ唯一の行き場たる自宅には帰れないのだから。

「まさしくホームレスね、今の上条君」

「……不幸だ」

「ま、ここで寝泊まりできるよう、掛け合ってあげるわ」

「ありがとうございます氷室様！」

さつきまで頭を抱えて蹲っていたのに、一瞬で自分の手を取り跪く上条の変わり身の早さに、氷室は若干頬を引き攣らせる。

「……どうせ私も泊まる気だしついでよ」

「へ？ 氷室も？」

「当然でしょ？ おそらく今日はもう襲ってはこないと思うけど、だからと言って安心はできないもの。彼女が入院している間はこちらにいるつもりよ？」

「いや、そこまでしてもらわなくても……」

「しなくちゃ共同戦線を組んだ意味ないじゃない。私にとって彼女
はあくまでついでのなのよ？」

「……そうだったな」

建前上、氷室は病院とそこに努める関係者及び入院患者の保護のためとなつている以上、インデックスの事はついでだ。

もともと入院患者のカテゴリにインデックスも含まれているため、どの道同じことなのだが。

「じゃ、そういうわけで……コレ」

「はい？」

おもむろに手渡されたものを見て上条は首を傾げる。
その手に置かれたのは髭面のおっさんが描かれた長方形の紙切れだ。

「あ、上条君には縁のない代物だった？」

「んなわけねーだろ！千円札ぐらい上条さんだって持ってるっの！」

「そう？　じゃ、そのコンビニ行って夕飯買ってきて」

「パシリかよ！」

「だってしょうがないじゃない。こんなことになるなんて思ってもみなかったんだから、部屋に帰ってから食べるつもりだったんだし……」

「うつ……」

それを言われると上条に言い返すことはできない。

半ば強引に応急処置から病院への搬送・手術の手筈を整えたのは氷室だとはいえ、それで助かったのは紛れもない事実であり、上条にしてみれば（インデックスの）命の恩人でもある。

しかしそのせいで夕食を食べそびれているとなれば、やはりそれは上条のせいということになる。

「というわけで、カルボナーラと旬の彩サラダとデザートにプリンとクリームたつぷりロールケーキ……あ、それとスナック菓子を二、三袋とポッキーと、後ジュース類もお願い。病院で買つと割高だから、いつその事１・５ペットで３本くらい」

「って、ちよつと待て。明らかに千円じゃ足りないと思うのですが？」

「え？　足りない分は上条君が出してくれるんでしょ？」

「なんでだ！」

「誰のせいで夕食食べそびれたのでしょうか？」

「上条さんのせいではありません」

「ですよー。ってなわけで串焼き３本も追加ね。食べたいものがあつたらついでに買ってきていいから。無論、自腹で」

むしろ千円出すだけでも殊勝よねえー、と暢気にのたまう氷室を恨めしそうに睨みつけ、上条ははたと動きを止めた。

「あ、あー……氷室さん？」

「ん？ なに？ 500円だけで良いって？」

「いやいやそんなことは一言も言っていないし！ というかですね…」

…」

「？」

ダラダラと汗を流しながらしどろもどろする上条の姿に、氷室は心底不思議そうに首を傾げる。

「実は今朝、上条さんはすっかりキャッシュカードを踏み碎いてしまいました、」

「いつもながらに見事なまでの不幸っぷりよね。いつそ感心するわ……」

「で、今現在の手持ち残金が30円しかないのをごさいますっ！」

「……………」

（何だろう、悲しくないのに涙がでちゃう。だって不幸だもの……）
心底憐れんだ目で見られ、上条の瞳からポロリと雫が零れ落ちた。

そんな上条に氷室はさらに高額紙幣を二枚追加で手渡し、その肩を優しく叩く。

「それで好きなもの買っていいわよ」

「その良心が心に痛い……」

「ちなみにトイチね」

「——って、利子取んのかよ！」

「10秒で1割」

「しかも暴利！ いまどき闇金の高利貸しだってもうちよつとマシだぞ！」

「いらないうらいけど……キャッシュカードの再発行って確か最悪一週間ぐらいかからなかったっけ？ あと手続き費用も——」

「ありがたく貸していただきます！」

背に腹は代えられない上条さんなのでした。

翌日の昼にはインデックスの容態も安定し、一般病棟へと移ること

ができた。

「にしても、ホント間一髪だったよなあ。助かったぜ、氷室。ほら、お前から礼を言え」

「あ、うん。ありがとだね、サツキ」

「いいわよ。困ったときはお互い様でしょ？」

肩をすくめ、軽く笑って大したことではないと告げる。

ちなみに自己紹介はすでに済ませている。その際上条が未だインデックスに名を告げていなかったことが判明し、ひと悶着あったがそれも解決した後だ。

「うつん、そんなことないよ」

氷室の気遣いにインデックスは僅かに上気した顔を静かに振る。

熱があるのは体が体力の回復を図っているため、特に問題があるわけではない。点滴と休息を続ければ数日後には普通の生活に戻れるようになるだろうと、医師のお墨付きも出ている。

「サツキのおかげで誰にも迷惑をかけずに済んだから。普通の人に魔術を使わせるのはあまりよくないからね」

「そうなのか？」

「うん。魔導書つてのは、危ないんだよ。そこに書かれている『異常識なる常識』に『違法則違える法則』——そういう『異常識違う世界』って、善悪の前に『この世界』にとっては有害なの」

『違う世界』の知識を知った人間の脳は、それだけで破壊されてしまふとインデックスは言う。

コンピュータのOSに対応していないプログラムを無理矢理に走らせるようなモノなんだろうか？ と上条は頭の中で翻訳した。

一方で氷室は別の考えを抱いていた。

（『異常識違う世界』の知識……私の持つ『原作』もある意味それだけど……）

だとすれば、自身はすでに壊れているのだろうか？

少なくともその自覚はない。壊れていないとは決して言い難いが、

それが『原作』知識のせいだとは呼べないと思う。

（でも、そう思っていないだけで、実際はどこか歪んでいるのかもね……）

自分の特殊性。『カウンターストップ 抑止力』という異常な能力。それらの根源が、もしかするとそこに由来するのだとすれば……。

（『この世界』にとつては有害、か……。そうかもしれないわね）
『氷室皐月』が居なくてもこの世界はキチンとまわり続ける。それこそ『原作』通りに突き進み、最後はなんだかんだでハッピーエンドが待っているのだろう。

未完のままこちらに来たためハッキリとは言えないが、でなければ読者が納得しないだろうし。

だとすれば、確かに『氷室皐月』は有毒な存在だ。

ハッピーエンド
『とある魔物のイレギュラー』
予定調和を打ち壊し、無用の混乱を招く、この世界の毒物。

（だからと言って、遅きに失している。もう後戻りはできない）
それに氷室だつて望んでこの世界にやってきたわけじゃない。

どこの誰の仕業かも不明で、もしかすると誰のせいでもないのかもしれない。

単なる偶然。神の奇跡。

なのにそれを一方的に『有毒』だと言われるのは実に不愉快だ。

（なら毒を以て毒を制すればいいだけよ。毒は使い方次第で薬にもなるんだから……）

それを為すのが自分の責務で、存在価値。

そうでも思っていないければ、異世界トリップなんてやってられないと、一人密かに自嘲した。

「……私は宗教防壁で脳と心を守っているし、人間を越えようとす
る魔術師は自らの常識げんかいを超え、発狂たどりつくする事を望んでる。でも、宗教
観の薄い普通の日本人なら一度なら平気かもだけど二度目なら確実

に――、終わる」

つまり『死ぬ』と。

「ふ、ふうん……」上条は受けた衝撃を何とか表に出さないように、
「何だよ、もったいねえ。折角なら誰かに錬金術とかやってもらおうかと思つてたのに。知つてんぞ錬金術。鉛を金に変えることができるんだろ？」

ちなみにその情報源は某女の子の錬金術師が主人公の道具調査RP
Gというのはもちろん内緒である。

「……、黄金の変換はできるけど――今の素材で道具を用意すると
この国のお金だと……えっと、7兆円ぐらいかかるかも」

「……、超意味ねえ」

「残念ね上条君。そう簡単にわらしべ長者にはなれないってことよ
魂の抜け落ちた上条の呟きに、氷室も含み笑いを浮かべながら揶揄
し、インデックスも弱々しく笑つて、

「……だよね。たかが鉛を金に変換したって貴族を喜ばせるしかで
きないもんね」

「けど、あれ？ 冷静に考えてみたら、それって何なの？ どうい
う原理？ 鉛を金に換えるって、まさか鉛と金の原子を組み替える
って、え？」

「よくわかんないけど、たかが14世紀の技術だよ？」

「ばっ……って事はアレか？ 原子配列変換って事でオツケーなの
！？ 加速器使わなくても陽子崩壊起こせて馬鹿でかい原子炉なく
ても核融合を引き起こせるってか！？ ちょっと待て、そんなの学
園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}だってできるかどうか分かんねー
ぞ！」

「あ、私できるけど？」

サラリと手を挙げた氷室の発言に、一瞬で場の空気が凍りついた。

「……、マジ？」

「やったことないけど。要は原子核同士の『核力』と『クーロン力』の関係が肝だから、そのベクトルを『止め』て調整すれば理論上はたぶんできる、と思う」

「って、どこが攻撃力皆無だよ！ 思いっきり原爆レベルじゃねーか！」

「だから実際に試したことないし、やろうとも思わないわよ。ってか、どこで使えってのよ、そんな大破壊力オーバーキル」

「いや、けど……」

理論上可能ってだけでも十分脅威だ。

今度から絶対に怒らせないようにしよう、と心に決める上条であった。

「と、とにかく、儀式で使う聖剣や魔杖を今の素材で代用するって言っても、限界があるんだよ？ ……特に神殺ロンギヌスしの槍、ヨセフの聖杯、The Roadゴルゴダの十字架なんていう神様関連の聖具なんかは1000

年経っても代用不可能らしいんだか……痛ッ……」

興奮して一気に捲し立てようとしたインデックスは、二日酔いみたいにこめかみを抑えた。

「無理して興奮しちゃダメでしょ。病み上がりなんだから……ほら、これ飲んで」

「う、うん……」

妹を叱りつける姉の様な口調で注意する氷室の手から、インデックスは水の入ったコップを受け取り小さく肩を窄めながらチビチビと飲み干す。

「と、言いつつ悪いんだけど……、いくつか聞きたいことがあるの。聞いてもいい？」

「う、うん。というか、サツキは私の事……」

「うん。上条君からあらましは聞いたわ」

その答えにインデックスが目には剣呑な光を宿して、上条を睨み付けた。

「とうま……」

「い、いや。だって俺一人じゃどうにもならないし、助けてもらった手前何にも話さないってのもな……」

「彼を責めないで上げて。私が無理矢理聞き出したようなものだし」

「でも、危ないんだよ？」

「知ってる」

「ホントにホントに危ないんだよ？ 殺されるかもしれないんだよ？」

「平気よ」

「なんで！ だって死ぬかもしれないんだよ！」

「そうね。でも私を殺せる『人間』はこの世界に“二人”しかいないから……」

「え……？」

何を言っているんだ、と目を丸くするインデックスに構わず、氷室はにこやかに微笑み、

「そして、私を殺していいのはこの世で“ただ一人だけ”よ」

その相手はずっと前からすでに決まっている。それは絶対に揺るがない決定事項だ。

氷室皐月はその人物以外に自分を殺させる気も殺される気もない。

「だから何の心配もないわ」

それが当然で、それが当たり前なのだと、何の疑問も気負いもなく答える氷室の姿に、残った二人はただ茫然とするしかなかった。

「だから聞かせて。貴女が抱えている事情を。貴女を取り巻く問題を。できる限りの力になりたいから……、ね？」

優しく、諭すように告げる氷室の姿に、インデックスは思わず『聖母』という単語を頭の中に思い浮かべた。

第四章 とある少女の諸々事情へサーカムスタンス（前書き）

ほぼ原作通り。

そして説明回のため、無駄に長い。

第四章 とある少女の諸々事情へサーカムスタンス

「とりあえず確認から……」

場が落ち着くのを見計らって改めて氷室が話を切り出す。

「まず、貴女が10万3000冊もの魔導書を記憶しているってのは本当？」

「うん、ちゃんと10万3000冊^{持って}記憶してるよ。でないと『禁書目録』とは呼べないからね」

「つてことはエイボンの書、^{レメゲトン}ソロモンの小さな鍵、^{ネームレス・カルツ}無名祭祀書、^{デ・ウェルミス・ミステリイ}妖蛆の秘密、食人祭祀書、金枝篇、エノクの書、断罪の書、ルルイエ異本、法の書、セラエノ断章、ナコト写本、^{アル・アジフ}野獣の咆哮の書、……なんて所も？」

「当然！ ^{もちろん}あ、でも死霊秘法は有名すぎるから亜流、偽書が多いくてどれが原本かわからないかも」
^{アル・アジフ}

「……上条さんには最初から全部わかりません」

初っ端から置いてけぼりを喰らっている上条を無視し、二人の会話は進む。

「それが本当なら……貴女は完全記憶能力者ってことになるわね」

「そう。だから私は『禁書目録』として選ばれたんだよ」

「あー、アイツもそんなこと言ってたけど、それってやっぱり珍しいのか？」

「当然よ。っていうか上条君、ちゃんと『記憶術』の授業聞いてたの、って、聞くまでもないか」

「悪かったな……どうせ、俺は氷室みたいに頭よくねーよ」

「そういう問題じゃないんだけど……」

上条のふてくされた態度に氷室は頭痛を耐えるかのように顔を顰め、頭を押さえる。

「記憶には短期記憶と長期記憶って言うのがあってね、基本的にまずは短期記憶として見たら聞いたことを覚えるのよ。でもこ

れはその名の通り『短期』的な記憶に過ぎないから普通はすぐに忘れてしまう。上条君が授業の内容を全く覚えていないのは、記憶の過程がこの短期記憶の段階で終わってるからね」

「……じゃあ、長期記憶ってのは？」

「こちらも文字通り『長期』に渡って継続する記憶の事よ。通常『記憶した』と呼ぶのはこつちね。記憶すべき事柄を何度も反復することで神経細胞の繋がりが強化され、短期記憶から長期記憶へと状態が移行するの。そして長期記憶となった記憶は基本的に失われることはないわ」

「そうなのか？ でも昔必死で覚えたことも、時間が経つと忘れてりするのだろ？」

「それは『忘れる』んじゃないくて『思い出せない』だけ。記憶の『想起』——『再生』か『再認』に問題が起きているからで、記憶自体はキチンと脳に刻まれたままよ」

「つまり再生機が壊れていても、記録装置にはキチンとデータが保存されている、って感じか」

「そういうこと。再生機を直してやればデータはきちんと再生されるでしょ？ だから『忘れてる』わけじゃないのよ」

「なるほどな」

「ちなみに上条君がテストで赤点取る原因は、長期記録に移行するために必要な反復が圧倒的に不足しているからよ。決して再生に問題があるわけじゃないから、勘違いしないように」

「ぐはっ——！」

痛いところをつかれた上条が胸元を抑えて呻くのを尻目に氷室は続ける。

「で、完全記憶能力者はこのプロセスを飛ばして一度で記憶を長期記憶に移行させるの」

「つまり物覚えがすごくいい、と」

「その代り無駄な情報も余さず覚えてしまつから一長一短ね。すぐに忘れてしまいたい記憶つてのも中にはあるでしょ？ それすら許

されず、全てを覚えてしまつのが完全記憶能力者よ」

「……………」

それはつまり『忘れる』ことができないということだ。

『忘れる』という行為は全て悪いというわけではない。

嫌な思い出や辛い記憶は『忘れる』ことで、以後の精神の安寧を保つことができるようになるのだ。

けど完全記憶能力者はそれが許されない。
インデックス

許されないから、ずっと辛い記憶を抱えたまま苦しみ続けることになる。

「なんだよ、それ……………」

「ま、ある意味では能力者と似たような障害者だとも言えるわね」
私たち

超能力も『誤った現実の認識』というある種の脳障害を利用して用いられる力だ。

そして学園都市における『開発』とは、その『障害』を人為的に誘発させることを意味している。

つまり能力者とは脳の障害者であり、学園都市はそんな障害者を量産する街だとも言える。

「えっと、よくわかんないけど、私は平気だよ。別にそれで困ったこととか全然ないし」

「でしようね。さっき上条君が言ったように記憶は時が経つと自然と『想起』がし辛くなるように出来てるから。だから自然と『思い出せなく』なるものなのよ」

「じゃあ、別に『忘れる』ことが出来なくても問題はないんだな」

「ええ」

人は『忘れる』ことはできなくても、『思い出さない』ようにすることはできる。

それを知って上条はホッと息を吐く。

もし昨夜の記憶を永遠に覚え続けているのなら、それは紛れもない『不幸』だと思うから。

けど、忘れることはできなくても、思い出せなくなるのなら問題ない。

インデックス

彼女が辛い記憶のせいですと苦しみ続けなくても済むのなら、それに越したことはない。

「けど、そもそもなんで『10万3000冊の魔導書』なんてものを覚えてんだ？」

「それは私が『禁書目録』だからだよ」

「だから、それだよ。あのスタイルとか言うヤツは『悪い見本』だとかなんとか言ってたけど、正直その理由ってのがよくわかんねーんだけど……」

魔導書が危険なものだというのはこれまでの話でなんとなく上条にも理解はできてきた。

しかしだからと言って、わざわざそんなものを覚える必要がどうしてあるのかが理解できない。

たった一冊でも発狂するような代物を、10万3000冊も覚える、その必要性が上条には見当たらなない。

その問いに対し、インデックスは少しだけ躊躇って、

「知りたい？」

そう、謝るように小さく問いかけた。

その静かな声は、いつでも明るいインデックスだからこそ、より一層の『決意』を思わせた。

正直な話、上条当麻にとってインデックスの事情なんてものはどうでもよかった。

どんな事情があるにせよ、上条当麻はインデックスという名の少女を見捨てる事なんてできはしないのだから。だから、とにかく『敵』

を倒してインデックスの身の安全さえ守れば、それでいい。わざわざ彼女の古傷を抉るような真似をする必要なんてない、と思っていたのに。

「私の抱えている事情、^{もの}ホントに知りたい？」

もう一度問われ、上条はその場にいるもう一人の協力者へと視線を向けた。

その協力者は静かに頷き、無言で「任せる」と答えた。

だから上条当麻は再びインデックスへと視線を戻し、覚悟を決めるように、答えた。

「なんていうか、それじゃこっちが神父さんみたいだな」

なんていうか、本当に。——罪人の懺悔を聞く神父さんみたいに。

何でだと思う？ とインデックスは言った。

カトリック プロテスタント

「十字教なんて元は一つなのに、旧教と新教、ローマ正教、ロシア成教、イギリス清教、ネストリウス派、アタナシウス派、グノーシス派。どうしてこんなに分かれちゃったんだと思う？」

「それは……」

いくら氷室に馬鹿だ馬鹿だと言われている上条でも、さすがにそこまで馬鹿じゃない。歴史の教科書を流し読みした程度の知識でも、その答えは容易に導き出せる。

だが、それを『本物』のインデックスの前で口に出すのは少し気が引けた。

そんな上条の心境を悟り、

「うん。それでいいんだよ」

インデックスは逆に笑った。

「宗教に政治を混ぜたから、だよ」

「厳密には完全に切り離さなかったから、と言った方がいいわね」
インデックスの答えに氷室が注釈を加える。

「切り離す？」

「日本語で政治は別名『まつりごと』と呼ぶでしょ？　つまりは『お祭り』——五穀豊穡や地鎮のために神へと捧げる儀式。それを仕切ることが政治本来の役目なのよ」

「つまり元は一つだった、ってことか」

「ええ。信者の前シスターでこんなこと言うのもなんだけど……」氷室はちらりとインデックスを伺い、彼女が静かに頷いたのを見て、「昔の人は天災や飢饉と言った人の力ではどうにもならない現象に対し怖れを抱いた結果、それを『神様』の仕業だと結論付けたわけ。理由がわからないより、どんなに荒唐無稽であつても何らかの理由があつた方が人は安心できるからね」

未知への探求心は、同時に『未知』を『既知』とすることで、理解できない恐怖を払拭しようというある種の防衛本能に根差すものでもあるとも言える。

「そしてその理由に対し、今度は何らかの対処を試みた。天災を避けるために、神の怒りを鎮めるために、祈祷や供物、生贄なんてものを捧げるという手段だね。これが宗教の始まり」

生贄という言葉に上条は僅かに顔を顰めたが、そういったことが行われていたことは知っているため黙って先を促す。

「けど次第に人が増えてくると、祭りの規模も大きくなって皆がバラバラにやっていたんじや収拾がつかなくなってくる。だからそれを取りまとめるリーダーが自ずと出来上がってきたのよ。村なら村長、街なら町長、そして国ともなれば——」

「国王。つまり王様だね」

「そう。そしてリーダーとなった人物は祭りのみならず、その他の事柄にまで引つ張り出されるようになった。争いの仲裁や問題への対応、解決とかね」

これが政治の始まりね、と氷室は言い、

「一方で宗教は人心掌握の手段としての一面を見せ始めた。多くの人を取り纏めるには意識の統一が肝心だから。物事に対する規範——これはよくて、これは悪い、なんていう尺度スケールを定め、その尺度スケールを

破った者には不幸や災難、即ち『神の裁き』が下るとすれば、誰もそこから外れたくなくなるでしょ？」

「要は法律ってわけか」

「そ。でも必ずしも守られるわけじゃない。法があればそれを破る者が必ず現れる。故意か不慮かを問わずにね」

やむにやまれず法を犯す者が出るのは世の常だ。逆に進んで法を犯す者も中にはいる。

「けど上条君じゃあるまいし『不幸』なんて普通は早々起きやしない。だから法を犯した者には現実に存在する誰かが罰を与えなければならぬ。それを与えるのは当然、纏め役であるリーダーの役割よ。でも、それって結局『悪事をなしても必ず神の裁きが起きるわけじゃない』と認めているようなものだから……」

「だから分離したのか」

「そういうこと。政治ってのは得てして綺麗事だけじゃ済まされないからね。時に悪事を以て事を納めなければならないこともある。でも人心を取り纏めるのにそれじゃ誰もついてはこない。人は悪よりも善に魅かれる生き物だから。だから綺麗事だけを並べて成立する『存在』ってのが必要なのよ。それが教会やお寺なんかの宗教組織ってわけね」

「けど元は同じものだから……」

「裏では繋がったまま。政治の悪を宗教的な善で覆い隠し、民衆に政治の正当性を示し、また隠しきれない場合でもそこを抛り所にすることで人心の乖離を最小限に防ぐ。そうして政治を最小の被害で円滑に進めることができるシステムを、当時の人達は築いたわけ。けどいつしかそのシステムを利用して私利私欲に走る者が現れた。無論、それを否定する者もね」

「その結果、私達は分裂し、対立し、争い合って——ついには同じ神様を信じる人さえ『敵』になって。私達は同じ神様を信じていながら、バラバラの道を歩く事になったんだよ」

それは人が人を支配する以上、必然的な事ではある。

誰もが皆、博愛精神に溢れていれば、この世に争いなんてことは起きやしない。

けど現実には争いは起き、戦争が勃発し、それにより命を落とす者がして、それに涙した者が為した者に対し恨みや憎しみを抱き、そしてまた争いが起きる。

歴史とは常にこの連鎖で成り立っている。そしてそれは今なお途切れることはなく、世界各地で何時燃え上がるとも知れない火種として残されている状況だ。一部では現在進行形で燃え上がっている場所もある。

「……交流を失った私達は、それぞれが独自の進化を遂げて『個性』を手に入れたの。国の様子とか風土とか——それぞれの事情に対応して、変化していったんだよ。ローマ正教は『世界の管理と運営』を、ロシア成教は『非現実^{オカルト}の検閲と削除』を。そして私の属するイギリス清協は……」

インデックスは、そこで僅かに言葉を詰まらせた。

「イギリスは、魔術の国だから」それが苦い思い出のように、「……イギリス清教は魔女狩りや異端狩り、宗教裁判——そういう『対魔術師』用の文化・技術が異常に発達したんだよ」

「そもそも魔術も神の奇跡も目に見える分には同じ非現実^{オカルト}だからね。宗教家としてはそれを不当に扱う存在を野放しにはできなかったでしょうし……」

自らの権威を守るため、神の奇跡を独占するため、理由は様々だろうが、無秩序に蔓延らせていては教会の存在意義に関わる事態となる。

必然的にそれらを排除する流れが作り出され、その過程で『対魔術師』用の文化・技術が瞬く間に発展していったのも当然と言えるだろう。

「イギリス清教にはね、特別な部署があるんだよ」

まるで自分の罪でも告白するかのように、インデックスはそつと言った。

「魔術師を討つために、魔術を調べ上げて対抗策を練る。ネセサリ必要悪の教会」

「ひつようあく？」

「そう。敵を知らなければ敵の攻撃を防げない。だけど、汚れた敵を理解すれば心が汚れ、汚れた敵に触れば体が汚れる。だから『汚れ』を一手に引き受ける必要悪の教会が生まれた。そしてその最たるものが……、」

「10万3000冊ってか」

「うん」インデックスは小さく頷き、「魔術つてのは式みたいなモノだから。上手に逆算すれば、相手の『攻撃』を中和させることもできるの。だから私は10万3000冊を叩き込まれた。……世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和できるはずだから」

上条は自分の右手を見た。

役立たずと思っていた右手。不良の一人も倒せないし、テストの点も上がらなければ女の子にモテる訳でもない。ただ『異能の力』を打ち消すことしか能のない右手の力。イマジンプレイカー

だけど、少女はそこへ辿り着くために地獄を見続けてきた。

「けど、魔導書なんてヤバイモン、場所が分かってんなら読まずに燃やしちやえばいいじゃねーか。魔導書を読んで学ぶヤツがいる限り、魔術師は増え続けんだろ？」

「バカね。テキスト教科書がなくても授業は可能でしょ？ 教師が口頭で内容を教えればいいだけなんだから。だからこの場合、『本』そのものに意味はないのよ」

「そう、重要なのは『中身』だから」

そういう人間は魔術師じゃなくて魔導師って言うんだけどね、とインデックスは言う。

「それに読み取っただけでは魔術師とは呼べない。そこから自分なりにアレンジを加え、新たな魔術を生み出してこそその魔術師なんだよ」

「変異性の高い病原体ウイルスみたいなモノってことね」
「なるほどな」

インフルエンザなんかを思い起こせば分かり易い。

インフルエンザの原因となるウイルスは変異しやすく、それでいて感染力が比較的高いのが特徴だ。

その歴史は古く、最古の記録は古代エジプト時代まで遡るとされている。

そして時々大流行しては多くの死者を生み出してきた。特に規模が大きいのは1918年頃に流行した通称『スペイン風邪』と呼ばれるインフルエンザだ。感染者6億人とも言われ、死亡者は4000万人を超えていると言われている。

その原因は先にも述べたとおり、その変異のし易さにある。

変異したウイルスはそれまでのものとは完全に別の存在となるため、過去に発症し生み出された抗体が役に立たない。そのため、免疫が十分に働かず、その強い毒性により、最悪死に至るケースが発生するのだ。

もちろんワクチンや治療薬も開発されてきたが、前者は効力が短期間でかつ培養に時間がかかるため、あらかじめ流行するであろう種類の予測と結果が異なれば十分な効果が認められず、後者はあくまでかかった後の対処法となるため場合によっては手遅れとなる事もある。

さらにそれに対応した新型も生まれ始め、結局のところイタチごっことなっているのが現状だ。

それでいて新型が発生したからと言って過去のウイルスが絶滅するわけでもない。段々と種類が増え続けながらも、その根本的な解決策は今をもっても存在しないのだ。

かといって放置すれば死者の数が膨大に及ぶため無視することもない。

だから常に新型の発生を監視し、予測し、研究し、早期に対処することで被害を最小限に収めるよう努力し続けるしかない。

インデックスの所属する必要悪の教会はそういった魔術ウィルスに対応するための組織というわけだ。

そしてその研究に必要なサンプル集として生み出されたのが『禁書インデックス』
目録』。

10万3000もの魔導書ウィルスを記憶させた研究資料。感染

「それに、魔導書はさっきも言った通り危険だから。写本コピーの処分ですえ専門の異端審問官は両目を縫って脳の汚染を防ぐ——それでも5年は洗礼を受けないと『毒』は抜け切れないけど」

「だとすれば原典オリジンともなれば殆ど『死病』に近いわけね。筆者も大抵狂人とかそういう人物像で伝えられているし……」

とりわけ有名なのは狂える詩人アブドウル・アルハザードだろう。彼は狂気の中で『死靈秘法ネクロノミコン』を書き記し、そのまま息絶えたとも言われているくらいだ。

書く方も読む方も強烈な邪気と狂気の中に晒される。それが魔導書の原典オリジナル。

「そうだよ。だから世界に散らばる10万3000冊は、どうしようもないからこそ『封印』するしか道がなかったんだよ」

まるで売れ残った核兵器みたいだ、と上条は思った。

むしろまさしくその通りなのだろう。処分しようにもできず、誰にも触れられない場所に放置することしかできない厄介物シロモノ。

「チッ。それにしたって魔術おれたちってな『能力者以外の普通の人間』なら誰でも扱えるモンなんだろ？ だったらあつという間に世界中に広まっちゃうじゃねーか」

「それは平気。魔術結社の連中も、無闇に外へは持ち出さないから」

「？ 何でだよ？ 連中にしたら、戦力なにかまは多いに越した事ねーだろ？」

「だからこそ」、なの。鉄砲持つてる人がみんな友達だったら、戦争は起きないよね？」

魔術を知っているからと言って、その全員が仲間だと言うわけではない。

むしろその威力と危険性を理解しているからこそ、無闇に広めて『敵の魔術師』を作るわけにもいかない。

逆に言えば、広まってしまうと自身が窮地に立たされかねない代物でもあるというわけだ。

「つまりは、だ。連中はお前の頭ん中にある“爆弾”を手に入れたって訳なんだな」

「……うん。10万3000冊は、全て使えば世界の全てを例外なく捻じ曲げる事ができる。私達は、それを『魔神』って呼んでいるの」

“魔界の神”という意味ではなく、“魔術を極め、神の領域に足を踏み入れた人間”という意味での、『魔神』。

(……ふざけやがって)

上条は無意識の内に奥歯を噛み締めていた。

インデックスの様子を見れば分かる。彼女だって何も好き好んで10万3000冊そんなものを頭に叩き込んだ訳ではない。

彼女は少しでも魔術によって犠牲になる者を減らすために生きてきたっていうのに……。

その気持ちを逆手に取る魔術師も気に食わなければ、そんな彼女を『汚れ』と呼ぶ教会も気に食わなかった。

(どいつもこいつも人間ひとをモノみたいに扱いやがって——)

そしてインデックスはそんな人間ばかりをずっと見てきたはずなのに。

「……、ごめんね」

それでもなお、他人の事ばかり考えている少女がインデックス一番気に食わなかった。

「つぎけんなよデメエ！」

上条は唐突に立ち上がると、パカンとインデックスのおでこを叩く。
「上条君！」

そんな突然の行動に、氷室も慌てて立ち上がるとインデックスを背後から抱きしめ、叩かれたおでこを摩りながら上条を睨み付ける。
理不尽な悪意いかりから子供を守る母親のように。

しかし上条はそんな視線に臆すこともなく、逆に睨み返すように見返す。

「氷室は少し黙っててくれ」

「……………」

その有無を言わさぬ迫力にさすがの氷室も口を閉ざし、代わりにインデックスを抱き締める腕に力を込めた。

「そんな大事な話、何で今まで黙ってやがった」

「だって。信じてくれると思わなかったし、怖がらせなくなかったし、その……あの、」

ほとんど泣き出しそうなインデックスの言葉はどんどん小さくなつていき、最後の方はほとんど聞こえなかった。
それでも、

“嫌われなくなかったから”

という言葉を上条は確かに聞いてしまった。

「ふ、ぎけんなよ。ざっけんなよデメエ……！」

氷室の耳にブチリという幻聴が確かに届いた。

「ナメた事言いやがって、人を勝手に値踏みするんじゃない！ 教会の秘密？ 10万3000冊の魔導書？ 確かにスゲーな、とんでもねー話だったし聞いた今でも信じらんねえような荒唐無稽なお話だよ」

だけどな、と上条はそこで一拍置いて、

「たった、それだけなんだろう？」

その言葉にインデックスの両目が見開かれた。

彼女の身体は小刻みに震え、小さな唇が何かを紡ごうと必死に動くが、言葉は何も出てこない。

「見てびってんじゃないねえ、たかだか10万3000冊を覚えた程度で気持ち悪いとか言うと思ってるのか！ 魔術師が向こうからやってきたらテメエを見捨ててさっさと逃げ出すとでも考えたのか？

ざっけんなよ。んな程度の覚悟ならハナからテメエを捨てたりしてねーんだよ！」

上条は口に出しながら、ようやく自分が何にイラついているのかを理解した。

悔しかったのだ。

上条は単にインデックスの役に立ちただけだった。何の見返りも求めず、ただこれ以上彼女が傷つくのを見たくなかった、それだけなのだ。

なのに、彼女は上条の身を庇おうとしても、決して上条に守ってもらおうとはしない。ただの一度さえ、彼女は「助けてほしい」と言った例がない。

頼ってほしいのに、頼られてはくれない。頼っていいのに、頼ろうとしてくれない。

それは、とても悔しいことだ。

それは、とてもとても、悔しいことだった。

「……ちつたあ俺を信用しやがれ。人を勝手に値踏みしてんじゃねーぞ」

たつたそれだけの事なのだ。

例えその右手に何の力がなくても、ただの一般人だったとしても、上条当麻には退く理由がない。

そんなもの、あるはずがない。

上条を突き動かすのは、インデックスを助けない、と言う至極単純なただそれだけの理由からだから。

だから他に特別な理由とか、特殊な事情とか、そんなものは初めから必要ない。ただ助けたいと思ったから助ける。

人としてごく当たり前の感情と行動を、上条は思うままに取っているだけなのだ。

それは見方によつては単なる我俣に過ぎない。けど我俣だから、誰かに言われたからと言って退く理由にもならない。

上条当麻は己の我俣でインデックスを助ける。だからインデックスも遠慮なく、その我俣を受け入れればいいのだ。それが許されるのだ。

そんな上条の言葉にインデックスはしばらく呆けたように上条の顔を見上げていたが、

ふえ、と。いきなり、目元にじわりと涙が浮かんだ。

それは春の訪れとともに始まった雪解けのように、次から次へと溢れ出す。

嗚咽を隠すように唇を噛みしめ、インデックスは必死に涙をせき止めようとしていた。

しかし一度決壊した堰は元には戻らず、洪水となってベツトを濡ら

していく。

おそらく上条の言葉だけが原因ではない。上条もそこまで自惚れてなどいない。

それはきつと、今の今まで溜め込んできたものが、上条の言葉を引き金として溢れ出してきただけなのだ。

そして今の今までこの程度の言葉すらかけてもらえなかったのか、と痛ましく思うとともに、それでもやっぱり上条は、ようやくインデックスの『弱さ』を見られたような気がして、少しだけ嬉しかった。

だが、やっぱり上条は女の子の涙を見ていつまでも喜んでいられるほど変態ではない。
というか、超気まずい。

何か言わなければ、ととつさに思考を働かせ——やめた。

上条が何も言わずとも、インデックスを抱き締めていた氷室がその胸の中に彼女の顔を隠したからだ。

そのまま何も言わず、ただ黙って氷室はインデックスの背を撫で続ける。まるで赤子をあやす母親の様な笑みを浮かべながら。

そんな光景を前に、くだらない気の利かない言葉を投げかけるのは野暮というものだ。

病室に一人の少女のくぐもった嗚咽が響き渡る。

上条はそれが止むのをただ黙って見守り続けた。

第四章 とある少女の諸々事情へサーカムスタンス（後書き）

作中の説明は諸所を省きざつくばんな話として挙げています。

細かいところを突けば矛盾点も出るでしょうが、そのあたりはご容赦の程を。

次回からオリジナル展開が出始めて………くると思います。おそらく。

第五章 とある少年の多肢選択〈マルチプルチョイス〉

「……なんか恥ずかしいね」

一通り泣き終えたインデックスは掛布団で赤くなった顔を半分隠しながら冗談めかしに呟いた。

目も少し腫れ赤くなっているが、それを指摘する者は誰もいない。

「あ、ごめんねサツキ。洋服、濡らしちゃって」

「平気よ。これぐらいならすぐに乾くわ」

夏だからね、と氷室は優しく微笑んでそつとインデックスの頭を撫でる。

「それより、もう少しだけ話を聞いてもいい？」

「あ、うん」

氷室の問いかけに姿勢を正したインデックスが小さく頷く。

「貴女を取り巻く状況は理解できたわ。10万3000冊の価値とそれを狙う者が居るってこともね」

「うん。だから何としても守らないと」

「殊勝な心がけね」

そう言つて氷室はもう一度インデックスの頭を撫でた。

それを猫みたいに撫つたそうにながらも嫌がらずに受け入れるインデックス。

実に微笑ましい光景だと、上条は先ほどの緊迫した心が和らぐのを実感する。

（やっぱ女の子同士だからだよな……）

男である上条ではこうはいかない。上条にできることと言えば、照れ隠しに彼女をからかって怒らせ、感情を高ぶらせることで強引に忘れさせるぐらいだ。もちろんそれでも一応の効果はあるだろうが、その代償として上条には『不幸』が跳ね返ってくるだろう。お冠の少女から頭を丸かじりされるといふ貴重な体験（貴重な体験）と言う形で。

「けど一つだけわからないことがあるの」

「なにが？　どこか説明が不十分なところでもあつたかな？」
自らの不備を疑い首を傾げるインデックスに、氷室は静かに首を振る。

「いいえ、そうじゃない。貴女がイギリス清教の必要悪の教会に所属していて、その組織内で重要な役割を担っているのは理解できてる。でも――」

そこで氷室は一旦言葉を切り、インデックスを真正面から捉え、

「そんな貴女が、何故一人で日本にいるの？」

「あ――、」

氷室の問いに上条はようやく気付いた。

確かにおかしい。変だ。ありえない。

『インデックス禁書目録』なんてモン作った連中が、それをたった一人で本拠地イギリスから遠く離れた島国ニホンに送り込むだろうか？

『インデックス禁書目録』を狙うヤツが居ると知っていて、一人にするだろうか？

するわけがない。普通なら必ず護衛の一人や二人つけるはず。でなきや奪ってくださいと言っているようなものだ。

なのに、インデックスは一人で逃げ回っていた。魔術師の追っ手からたった一人で逃げ回り、屋上から飛び降り、上条の部屋のベランダへと落っこちて行き倒れるハメとなっていた。

だったら護衛はどうなった？　つけられているべき護衛は、一体どこで何をしているんだ？

少女が斬られ、『禁書目録』が奪われそうになってなお、その姿を見せないのはなんでだ？

「たぶんこの国に悪い魔術師いたんしゃが居て、それを狩るために来たんだと思う」

「まあ、貴女の役割を考えればそうでしょうね。……けど一人で？」
インデックスは10万3000冊の魔導書を抱えてはいるが、それを使うことはできないと言っていたのを上条は思い出す。

魔力を練ることができないかららしいが、そのせいで回復魔術は知っていても、それで自分の傷を癒すことすらできなかったのだ。

だから仕方なく、魔術を使うことができる人間——この学園都市で『開発』を受けていない数少ない『大人』である小萌先生を頼ろうとしたのだ。

そんなインデックスがいくら敵の魔術師の攻撃を中和する術を知っているからと言って、一人で倒すことなんてできるのだろうか？

絶対防御力を持つ『歩く教会』があつたからと言って、それは身を守るだけで攻撃にはなんの役にも立ちもしない。倒すためには攻撃する必要がある、そのための魔術をインデックスは使うことができない。

なら、使える人間と一緒に行動していなければおかしい。

それなのに、

「たぶんそうだと思う」

「……たぶん？」

曖昧な言葉に上条は思わず眉を顰める。

“たぶん”、“思う”。さっきからそんな推定を表す言葉ばかりが繰り返されている。

インデックスは完全記憶能力者だ。なら当然その事も覚えていなければおかしい。

いや、例えそんな能力完全記憶能力を持っていなくても、普通は忘れない。忘れるわけがない。

だけどそれが分からないということは、つまり——

「うん。1年前いちねんぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスは笑っていた。

完璧に、一切の曇りなく、笑っていた。

だから上条には、その裏にある焦りや辛さが見て取れた。

「最初に裏路地で目を覚ました時は、自分の事もわからなかった。

だけど、とにかく逃げなきゃって思った。昨日の晩御飯も思い出せ

ないのに、魔術師とか禁書目録とか必要悪の教会とか、そんな知識

ばっかりぐるぐる回ってて、本当に怖かった……」

「……じゃあ。どうして記憶を失くしちゃったのかも分かんねーって訳か」

うん、と小さく答えるインデックス。

上条だって心理学はサッパリわからないが、ゲームやドラマからの知識で記憶喪失の原因となるものぐらいは知っている。

記憶を失うほど頭にダメージを受けたか、心の方が耐えられない記憶を封印しているか——この何れかだ。

ちらりと視線を氷室へと向ける。

氷室は小さく首を振ってその視線に答えた。

（今は聞くな、ってことか……）

インデックスが辛い思いをしているのは氷室も理解しているのだろう。

だからこそ、今ここでそれを根掘り葉掘り聞き出して古傷を抉る様な真似をする必要はない。ただでさえ、ついさっきまでそんな惨いことをさせていたのだ。だからこれ以上は、少なくとも今すべきことではない。

氷室に頷き返し、胸の内で暴れ回る感情と一緒に上条は押し黙る。

「えっと、聞きたいのはそれだけ？」

「ええ、とりあえずは。そろそろお昼の時間だし、ずっと話せばなしで疲れたでしょ？ それまで少し休んでた方がいいわ」

「だな。あ、でも食事はあまり期待するなよ。病院食なんてどこもマズイって相場が決まってるしな」

「むむ、失礼だとうま。出されたご飯はマズくてもちゃんと食べないと。でないとバチが当たるんだから。“もったいない”って、確かこの国の言葉だよな？」

すてきな言葉だよな、と笑うインデックスにもう一度氷室はその頭を撫でる。

「そうね。それに栄養バランスとか考えて作られているから、しっかり食べないとよくなるものもよくらないしね」

「だな。病人なんだから、食うもの食ってちゃんと寝てろ」

「病人じゃなくて怪我人だよ」

「どっちもたいして変わんねーだろーが」

上条も氷室にならってインデックスの頭をぐしゃぐしゃと撫でまわす。

その光景は第三者がこの場にいれば、病氣の子供を見舞う両親のように映ったに違いない。

「じゃ、私は少し着替えてくるから……上条君、ちよつといい？」

「あ、ああ……。ちゃんと寝てろよ」

「むう、お子ちゃまじゃないんだからわかってるよ、そんなこと」
むくれるインデックスの姿に苦笑しつつ、上条と氷室は病室を後にする。

扉が閉まりインデックスが視界から消えると、氷室は徐に能力を行使し、周囲に防音の結界を築く。

それを見計らって上条は徐に口を開いた。

「知ってたのか……」

「記憶喪失の事？」

「ああ」

「可能性としてはね」

「なんでだ」

「気づいてると思うけど、彼女が一人つきりでいる状況なんて本来

ならありえない」

「それはわかってる」

「けど現実として、彼女は一人きりで上条君以外に頼れる存在みかたがない。そして彼女自身それをおかしいとすら思っていなかった」

「だから、忘れている、と？」

「ええ。あくまでその可能性があるかも、ってレベルだったけどこれで確証が取れたわ」

「だからあえて問いかけたのだ。他に誰かいないのかと。彼女の味方となってくれる存在はいないのかと。」

「けど、そうだとすると少し事情が変わってくるわね」

「どういうことだよ」

「あの子、思い出を綺麗サッパリ忘れているのよ？ それでいて知識だけは残ってる。だからその知識だけを頼りに物事を判断してきたの」

それは普通の事ではないのだろうか。

上条は記憶を失ったことは『幸運』にも未だないが、知識だけしか存在しないのであれば、それを判断基準として行動するしかない。そしてインデックスは訳も分からない状況のまま1年もの間逃げ回り続け、ようやく会えた最初の『知り合い』がたまたま、上条だっただけなのだ。

だから異常に嫌われるのを恐れ、傷つくのを恐れ、何が何でも守ろうとした。自分の身が危険にさらされる事を理解していながら、発信機の役割を持つ、未だ壊れていなかった『歩く教会』のフードを取りに戻ってきたのだ。

「くそつたれが……」

「気持ち分かる、とは言わないわ。途中から割り込んだ私には貴方とあの子の間にあるものを真に理解はできないから。でも、責める事だけはいらないであって」

「ああ。わかってるさ」

憤っているのはむしろ自分の方にだ。

そんなことも知らず、理解しようともせず、助けを必要としている事を理解していながら、そうしなかった自分に対して憤っているのだ。

だからインデックスを責めるつもりなんて毛頭ない。必死になって生きて、その必死さの中でも他人を気遣おうとしたインデックスを責める事なんてできる筈がない。そんな資格、上条にはない。

「それで？」

何とか気持ちを落ち着け——それでも奥底では様々な感情が渦巻いている状態だが——、上条は先を促す。

「ええ。知識だけでしか判断できないあの子は、自分の持つ『禁書目録』^{だん}を守らなくちゃ、という使命感だけで動いている。だから魔術師が近くにいれば当然逃げるっていう選択肢を選ぶわね」

「だろうな。そいつらが何のためにインデックスを必要としているのかはわかんねーけど、だからと言っておいそれと渡していいもんじやないからな」

「そうよ。でも、考えてみて。あの子に着けられていたはずの護衛つてのも、その魔術師ってやつなんじゃないの？」

「あ——」

魔術師が狙ってきているのなら、魔術師を護衛としてつけるのは当然だろう。

けどインデックスには記憶がない。誰が護衛^{みかた}で誰がそうじゃないかの判断が付けられない。

だから魔術師であるのなら、敵も味方も関係なく、須らく『禁書目録^{てき}を狙う存在』^{みかた}として判断して逃げ出す。それが自分を守ってくれる存在^{みかた}としても、だ。

「だから、あくまで可能性の話としてだけ……」そう氷室は念を押して、「そのステイルって魔術師が彼女の護衛である可能性もあり得るかもしれないってことよ」

「なっ——」

一瞬言葉を失った。しかし直後にそれを否定する。

「いや、ありえないだろう。もしそうならなんでインデックスを傷つける必要があるんだよ！」

味方ならそんなことする筈がない、と言う上条に、もう一度“可能性の話だ”と念を押し、

「今のあの子にとつて魔術師の語る言葉は自分を誑かす甘言に過ぎない。そう判断しないと、万が一本当に騙されていた場合、『禁書目録』を悪用されてしまうから」

だからあの子はひたすら逃げ続けるしかない、と氷室は続け、

「でも必要悪の教会側からしてみれば、何が何でも彼女を『回収』」

しなくちゃならない。他の連中に奪われるわけにはいかないからね。記憶を失っているのなら尚更よ。だけど聞く耳を持たず逃げ回る相手を『回収』する術は、もう実力行使しか残されていないんじゃないかしら？」

『歩く教会』もあつたことだしね、と言つて肩をすくめる。

確かに連中もインデックスの『歩く教会』が壊れていることを知らなかった。だから斬れるはずがないと思い斬つた可能性は大にある。

「けど、それでもあんなこととしていい理由にはならない。それにアイツは教会に行こうとしてたんだろ？　なら別に無理に回収しようとしなくて自然と戻つて来るはずじゃねーか」

「そうね。でもそれを彼らが知らなかった、気づかなかったという可能性もある。それに万が一知っていたとしても、妨害する理由はあるわ」

「理由？」

「そう、……上条君。さっきの会話で教会にも色々種類があるって話は覚えてる？」

「ああ。さすがにそれぐらいは覚えてるさ」

そう答えて、そういえば、と上条は昨日の朝にしたインデックスとの会話を思い出す。別の教会に行っても門前払いを受けるといった話だ。

だが、もし彼女が『禁書目録』だと相手側の教会が知ったら、門前払いでなく率先して保護しようとするかもしれない。それだけの価値がインデックスにはあるのだから。

しかしインデックスはキッチンと自ら所属するイギリス清教の教会を探していた。

ならまかり間違って違い教会の戸を叩くことはないだろうから、やはり力ずくで阻止する理由にはならない。

そう言うと、氷室は「そうじゃない」と否定し、肩を竦め、

「十字教は元は一つだったのに分裂してバラバラになった。けどそれってもう終わった過去の事なのかしら？」

「それは……」

「うん。教会の歴史とかそういうのに限らず、人が作る組織ってのには必ず派閥ってものが存在するわ。権力の椅子は数が限られているからね。そして彼女は『禁書目録』、イギリス清教の切り札とも呼べる存在。そんな彼女を手中に収めれば、組織内での発言力、権力は揺るぎようのない、絶大なものになるんじゃないしら？」

「つまり、インデックスを手に入れてのし上がるうとしているヤツが居るってことか？」

だとすれば上条にも理解できる。

インデックスの向かった教会の人間が自分の派閥の人間だとは限らないわけだから、確実に自分の手に入れるために強硬手段を取るのもわかる。

けど、だからと言って力ずくでというのは許される行為ではないし、インデックスをそんな風に使うこと自体、上条には許せない行為だ。

「あくまで可能性の話よ。ステイルとかいう魔術師が組織とは無関係に個人的理由で動いている可能性もあるし、単に『禁書目録』に掛れた魔術を手に入れる事自体が目的の可能性もある。もちろん、敵対組織の人間である可能性もね」

けどね、と氷室は上条を真正面から捉え見つめる。

強い意志を感じさせる瞳に、上条は知れず唾を飲み込んだ。

「あの子は『禁書目録』よ。イギリス清教の切り札。その価値は彼女が『禁書目録』であり続ける限り失われることはないの」
つまり、

「彼女を手にした人物が魔術だけでなく、権力まで手に入れる事ができるって事実は永遠に付きまとうのよ」

「な——、それじゃあ、インデックスがイギリスに帰れたとしても……」

「政争の具として使われる可能性は決して消えない。そして私たちもあの子自身も、誰が本当の味方なのかを判断することができない。いいえ、本当は味方なんて誰一人いない可能性すらある」

記憶を失ったインデックスに、組織内で誰が親しかつたかと言う記憶は存在しない。いや、たとえ覚えていたとしても裏では利用しようとしていたのかもしれない。

そもそも『禁書目録』なんてふざけたシステムを考えるような連中だ。善人であるはずがない。

「ちつくしょお——！」

ゴン、と近くの壁を叩く。

「なんだよそりゃ、ざっけんなよ！」

例え魔術師の手からインデックスを守り切れたとしても、守りきった先でまた別の誰かの思惑に踊らされることになる。

それじゃあ救われない。どうあってもインデックスは救われない。

「落ち着きなさい」

「これが落ち着けるかよ！　だってそんなのアリかよ。そんな事あつていいのかよ！」

「仕方ないわ」

「仕方ない？」

思わず上条は氷室の胸ぐらを掴みあげる。

「仕方ないってなんだよ！ 氷室はインデックスがそういう目にあっていいっていうのかよ！」

「よくないわよ」

「だったら！」

「だったら、私たちに何ができるというの？ ネセサリウス 必要悪の教会の内情なんて知らない、その存在だって今さっき知ったばかりの私たちが、その組織に対して何ができるっていうの？」

「——っ！」

そう、何もできない。氷室も上条もただの高校生だ。能力者ではあるが、政治的な権力なんて何一つ持ち合わせていない、ただの一般人に過ぎない。

そんな自分たちが、異国の、それも常識すら異なる世界の、その最たる暗部組織に干渉することなんてできるわけがない。

それを氷室はわかっていて、わかっているからこそ「仕方ない」と割り切るしかないと理解している。“理解せざるを得ない”ことを理解している。

（そうだ、わかってる。わかってるさ、氷室だって辛いつてことくらい……）

先の病室での光景を見れば、氷室がインデックスの事をどうでもいいと思っているなんて思える筈がない。

怒りにまかせ怒鳴りつけた上条を睨み付け、彼女を守るように抱き締めていた氷室が、インデックスをどう思っているかなど確かめるまでもないことだ。

それなのに——

「くっそ——、」

自分の浅はかさに苛立ち、とりあえず氷室から手を離す。

それでもやりきれない気持ちを吐き出すために、無意味に壁を殴りつけた。

「なら、どうすればいいってんだよ。どうすればインデックスは救われるんだよ……」

敵を倒せばいいと思っていた。敵を倒してインデックスを教会に連れて行けばいいと、そう思っていた。

それはよくあるRPGの勇者ヒーローのように、魔王を倒して捕らわれのお姫様をお城に返してハッピーエンド、そういう類の話だと上条当麻は思っていた。信じていた。

けど現実はそのじゃない。エンディングの後にもお話は当然のように続いていく。

お姫様は魔王に汚されていたとか言われて迫害を受けるかもしれない。魔物に荒らされ下がった国力を回復するためにクソツタレな隣国の王子と無理やり結婚をさせられてしまうかもしれない。

けどそれらに対し勇者にできることは何一つない。勇者の役割は魔王を倒してお姫様をお城に返すところまでだ。それさえ済んでしまえば用無しの穀潰しでしかない。

だから、上条当麻あいつにはインデックスを真に救うことはできない。これはそういうお話。

「一つだけ、方法がないこともないわ」

「ホントかつ！」

絶望に瀕した上条は、その一言に縋るように氷室へと食らいついた。否、真実縋っていた。縋るよりほかになかった。

「教えてくれ氷室！ その方法つてのを。インデックスを救うために俺は何をすればいい。何が俺にできる。何でもする、なんだつてやってやる！ だから——」

「その言葉、嘘じゃない？ 本当に後悔しない？」

「するかよ！ アイツがこれ以上辛い思いをしなくて済むってんなら、なんだつていい。俺にできる事なら全部してやるさ！」

「そう——」

上条の言葉に僅かに視線を伏せた氷室は、そのままゆっくりと顔を上げ、

「なら、上条君があの子を守りなさい。魔術師から、教会から、あの子に価値を見出す世界中の全ての存在から、あの子を一生かけて守り抜きなさい」

「――」

上条の口からは何の言葉が出なかった。理解が追い付かなかったからだ。

それを理解していてなお、氷室は続ける。

「言つとくけど、生半可な事じゃないから。誰が敵か味方かもわからない――いいえ、全てを敵とみなし排除するの。個人も組織も関係ない。立ち寄ったレストランで隣の席に座る人物も、街ですれ違っただけの御老人でも、その全て敵と判断して近寄ってくるなら須らく排除するの」

「すべて……」

「そうよ。あの子に価値を求めるのは何も魔術側の人間だけじゃない。この学園都市の科学者だって、異なる法則、異なる常識の存在を知れば、研究しようとする輩は当然いるでしょうね。そんなヤツがインデックスが10万3000冊の原典魔術オリジナルスベルを所持していると知れば、寄って集って手に入れようとするわよ？」

そうだ。『開発』なんて面倒な事をしなくても能力者と同等、もしくはそれ以上の力を使える術があると知れば興味を持たないわけがない。

そんな奴からもインデックスは10万3000冊を守っているのに、そんな奴らに協力を申し出ることはできない。

学園都市は頼れない。他の教会や魔術結社も当然ダメ。だったら国か？ どの？ その国がインデックスを利用しようとしないとどうして言いきれん？

なら組織は頼れない。けど相手は組織だ。上条当麻こじま一人の力で抗えるほど容易い相手ではない。いや、無理だ。不可能だ。

だったら組織に属さない誰かに協力を求めるか？　けどその人物が本当にインデックスを守ろうとしてくれるのか？　そいつもインデックスの10万3000冊を狙っていないとどうやって判断できる？

ああ、と上条は理解した。

氷室が問うた覚悟の意味を。憐れみの籠った視線の意味も。

ああ、と上条は理解した。

インデックスの現状を。今までどんな気持ちで彼女が逃げ回っていたのかを。

——私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？

（ああ、確かに地獄だよ。地獄の底だよ、ここは）

インデックスが居たのは地獄の淵なんかじゃなかった。インデックスのいる場所が常に地獄の底——中心なのだ。

だから彼女を守りたいのなら、助けたいのなら、自分もそこについていく必要があったのだ。ついて行って、ずっと付き従う必要があったのだ。

（はは、なんだ。アイツ最初からわかってたんじゃねーか）

それを上条は正しく理解していなかっただけ。気安く考え、安易な気持ちで“助けたい”なんて思っていただけだ。

“助ける”という言葉の意味を正しく理解しないまま、英雄^{ヒーロー}を気取るうとしていただけなのだ。

「言うておくけど、一番いい答えは今すぐイギリス清教に連絡を取って彼女を迎えに来てもらう事よ」

「ああ……」

「それで来たのがステイルとかいう魔術師でも、他の組織の人間であつてもよ？」

「っ——、」

「それが嫌ならロンドンまで一緒について行って、教会に直接引き渡せばいいわ。それですべてが終わる。あの子との関係もそこで切れる」

「……………」

「それでも嫌だというのなら、自分の一生をあの子に捧げなさい。

世界中を敵に回して逃げ続けなさい。私はそこまで付き合えないから」

「……………ああ、わかってる」

わかってる。もともと巻き込まれただけの氷室に、それ以上を求める義理はない。

インデックスの怪我を直してもらった。完全に回復するまで一緒に守ってくれると言ってくれた。

それだけでもう十分だ。それだけでもう十分すぎるのだ。

だから、そこから先は上条の問題だ。氷室にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「決めるのは貴方よ。他の誰でもない、貴方が納得のいく答えを、貴方自身の意思で決めなさい」

「ああ……………」

「猶予はあるわ。退院は術後の経過観察と検査を含めて4日後。それまでは現状維持でも十分。私も約束通りあの子を守るわ。でも退院すれば、あの子はこれまで通り教会に保護してもらうために行動するでしょうね」

だから4日がリミットなのだと。

上条がどう思おうと、それを過ぎたらインデックスは教会へと赴く。そして上条の思いなど無視して、教会のために働くことになるだろう。それがただ利用されているだけなのだとしても、そこが彼女がいるべき本来の場所なのだから。

「それと今の話はあの子にはしないように。すでにわかってるかもしれないけど、無用な心配をさせる必要もないでしょ？ それにそ

れで上条君が悩んでいるのだと知れば怪我しているのも構わずに姿を消すと思うから、あの子」

「だろうな……」

上条を巻き込みたくがないゆえに、自身の危険を差し置いてフードを取りに戻ってきたような人間だ。

自分のせいで上条が悩んでいると知れば、姿を消す。上条が悩む必要などどこにもないのだと言って。

「精々悩みなさい。悩んで、答えを出しなさい」

そう言うのと氷室は上条に背を向けて廊下の向こうへと歩き始める。

そして数歩進んだところで、ふと立ち止まり顔だけを上条へと向けた。

「ああ、最後にこれだけは言っておくわ——」

そう告げて、その一言が言い終わると躊躇うことなく氷室はその場から立ち去った。

その姿を見届けた上条は、もう一度だけ壁を殴りつける。

「わかってる。わかってんだよ、そんなことは——」

氷室が最後に告げた言葉が上条の胸に深く突き刺さる。

——全部思い通りになるなんて、そんな都合のいいことこの世には存在しないのよ。

「それでも……」

上条当麻には認められない。

インデックスを救う方法がこの世に存在しない、だなんて。

第六章 とある病室での異文化交流へカルチャースクール（前書き）

徐々に閲覧数が増えてきてうれしい限りです。

感想、ご指摘随時受付中です。

率直な感想をいただけるとやる気がアップするかもしれません。

また話中に出てくる魔術理論に関しては若干の独自解釈を行っております。

原作とは少し設定が異なるかもしれませんが、この物語の中ではそういうことだと理解していただけたらと思います。

第六章 とある病室での異文化交流へカルチャースクール

あれから3日が経過した。

インデックスの容態はすこぶる良好で、傷は完全に塞がり跡も残らないという。

体調もほとんど回復し、明日の検査結果次第では即日退院が可能だと、あのカエル顔の医師が言っていた。

それは大変喜ばしいことで、素直に喜ぶべきことだ。
なのに、

「……………はあ」

真夏の炎天下の中、上条当麻は深いため息を吐いた。

インデックスの怪我が治ることは確かにうれしい。それは紛れもなく本心だ。

だが明日が退院と言うことは、上条にとっては今日が制限時間タイムリミットの最終日と言うことになる。

答えはまだ出ていない。いや、出る筈がないことは初めからわかっていたことだ。

どんな答えを選んだところでインデックスは救われない。

彼女の望みどおりに教会へ送り届けても、待っているのは道具として利用される運命だ。

かといって氷室の提案通りインデックスに近づく全てを上条が排除し続けても、それはそれでインデックスに罪悪感を抱かせることとなり、結局苦しませることになる。そして最後は上条が潰され、彼女をもつと悲しませるのだろう。

「けど、答えはださないと」

無論、上条が何もせずとも答えは出る。インデックスが退院すれば彼女は教会の門を叩き保護を求め、そしてイギリスへと帰っていく

だろう。そして道具としての人生を生きることとなる。

しかしそれは上条の納得いく結果ではない。結果的にそうなったというだけで、上条が納得のいく答えとはなりえない。

それが正しい姿で、一番いい結果なのは上条とて理解できている。けど許せない、させたくない、と思っている以上、上条にとってその結果は受け入れがたい結末だ。

けど受け入れなくてはならない。受け入れるために、氷室はわざわざ悪役を買って出てくれたのだから。

正直な話、あの場でその事実を話す必要はまるでなかった。

話さずに、当初の予定通り敵を倒してインデックスを教会に連れて行けば万事解決、と言うことにしておいてくれていれば少なくとも上条は疑う事すらなく終わりを迎えていたはずだ。

けどあえて氷室はそれを言った。

それは後になって上条がその事実^{こと}に気付き、後悔しないようにするため。

同じ悔やむのならば、取り返しのつかない状況に陥ってからではなく、まだ選択の余地が残されている内に悩んで悩んで、悩み抜いた上に出した答えのもと悔やんだ方がいい。そういう気遣いのもとに言ったのだ、氷室は。

それで上条から恨まれることも覚悟の上で、自分だって納得しきれていないだろうに、それでも一番ショックを受けるであろう上条を気遣って、話したのだ。

時間が経ち、冷静さを取り戻してからそれに気づいた上条は、本当に敵わないと思った。

頭がいいとかそういう話ではなく、人としての器が違う。

上条ではたとえその事実にまで辿り着けたとしても、同じ行動を取れるかどうかわからない。自分の事で精一杯で他人を気遣う余裕なんてきつとないに違いないと思う。

それをあの短時間で見抜き、決断し、実行するなんて上条には無理だ。

だから上条当麻は答えを出さなければならぬ。

氷室のためにも、上条自身のためにも。

後悔しないための、後悔の道を選ばなければならぬ。

気付けば病院の玄関へと辿り着いていた。

ここからインデックスの病室まではさほど時間はかからない。

答えはもちろん出てはいない。

しかしだからと言ってそれに悩む姿をインデックスの前に晒すわけにもいかない。

インデックスも自分より他人を優先して気遣う類の人間だ。上条がそんな姿を見せていれば、自分のせいだとすぐに察して無茶をするに決まっている。

上条がこうして外に追いやられたのもそれが原因だ。

氷室に、その辛気臭い顔を出直してきなさい、と暗に言われ、口実として買い出しを託されたのだ。

上条自身もできる限り表に出さないように心掛けていたのだが、やはり制限時間が迫るにつれ、気付かないうちに剥がれてきていたのだろう。

「しつかりしないと」

気遣いばかりかけられている自身の不甲斐なさに喝を入れ、上条は病院の廊下を突き進む。

昼間と言うこともあってか多くの人が診察に訪れ、入院患者も多数行き来している。無論彼らの面倒を見る医師や看護師も忙しく動き回っている。

美人な看護師さんのミニスカにちょっと目を奪われつつも、上条はこの3日間の事を思い返す。

昼の間は氷室と上条が出来る限りインデックスの病室で待機し、彼女の暇つぶし相手を務めつつ魔術師の襲撃に備えていた。

さすがに連中も人気の多い昼間の病院で襲つてはこないだろうと上条は思っていたのだが、インデックス曰く魔術には『人払い』というものがあるらしい。

文字通りその効果の及ぶ範囲内へと人が踏み込めないようにするものらしいが、強制的な排除ではなく無意識のうちにそちらを避けるようにする類なのとか。薄気味悪い場所には近寄りたくない、といった感じなのかと上条は解釈している。おそらくステイルと戦った際に寮に誰もいなかったも、その『人払い』が仕掛けられていたからだろう。

しかしそうだとすれば昼間でも意図的に人目のつかない空間を作れるということになる。故に警戒を怠るわけにはいかなかった。

夜は交代制で仮眠を取り、昼間どうしても用事がある際はどちらか一方が必ずその場に残る事になっていた。

ちなみに夏休みの補習に関しては氷室が小萌先生に直談判をし、インデックスが退院するまでは保留という事にくれていた。もつともなくなつたわけではないため、事が済めば再び補習地獄へと戻らなければならぬのだが。

そしてそれが功を奏したのかはわからないがこの3日間、幸いなことに魔術師たちの襲撃はなかった。

氷室曰く「相手もインデックスが死ぬような事態は避けたいはず」との事で、今は彼女の回復を優先しあえて控えているのだろうとの事だ。

確かにインデックスが死んでしまえば、彼女が記憶している10万3000冊は失われる事になるわけだから、その予想は間違つてはいないと上条も思う。

しかしもうほとんど回復し退院を間近にした現状、いつ襲われても

おかしくはない。

病室へと辿り着き、一度深呼吸をし、気持ちを切り替える。

中からは少女二人の話し声が聞こえ、未だインデックスが無事であることに少しだけ安堵する。

そしてそんな少女の無事な姿をその目も確認するため上条は徐にドアを開け、

「じゃあただルーンを書いただけじゃ、魔術は発動しないのね」

「うん。オリジナルならともかく、ただの一般人が単に刻んだだけじゃ意味がないの。ルーンって普通にアクセサリーとかお守りとか、そういつたのに刻まれてお土産として売られてるでしょ？　そういつたものまで無闇矢鱈と力を発揮したんじゃ、危ないよね」

「でも、それだと市販のお守りには効果がないってこと？」

「ううん、そういうわけでもないんだよ。厳密には効果はあるけど大した力は持っていないの。サツキは偶像理論って知ってる？」

「“類似したもの同士は互いに影響を及ぼしあう”、いわゆる類感呪術でしょ？」

「そう、教会の屋根にある十字架はゴルゴダの十字架って訳じゃないけど、それでも同じ力は宿ってる。もちろんオリジナルゴルゴダの十字架には遠く及ばないけどね。でも力の種類は同じ。同じ性質、同じ状態、同じ能力を秘めてるの。そしてオリジナルにより近いものなら、それだけ力も強くなるんだよ。これを私たちは『テレズマ天使の力』って呼んでるんだけど」

「確かその言葉の起源はS 黄金の夜明け団M だったかしら？　クローリーが所属してたっていう」

「近代西洋魔術の雛型となった魔術結社だね。今は分裂して『黄金系』と呼ばれる複数の結社が存在するだけだね」

「つまり出力が足りないから書いただけでは意味が無いってことね。

……でもルーンを使った魔術は実在する」

「それは魔術師が足りない分の力を自らの魔力で補ってるからだよ。だから魔力を練る方法知らない一般人が刻んでも意味はないけど、魔力を練って注ぐことができる魔術師なら、キッチンとその力を発揮させることができるの。もちろん刻むルーンもオリジナルに限りなく近くすれば、その分だけ必要とする魔力も減るし、同じ魔力の量ならその分威力は増す事になる」

「つまり魔力つてのは増強剤ブースターって訳ね」

ふむふむと頷きながら氷室がノートに何かを書き込んでいく。

そんな様子を病室の入り口で間抜け顔を晒しながら茫然と見つめる上条の心境は、

(……さっぱりわからん)

何について話しているのかは理解できるが、そこで話されている内容となるとサッパリ理解不能だった。

元々無能力レベル0である以前に上条は学力においても『不良』である。にもかかわらず科学とは根本的な理論やら常識の異なる魔術を理解することは宇宙人と会話するに等しい難題だ。

まさしく異文化コミュニケーション。英語すらまともに離せない上条にそれを求めるのは無理があるというものだ。

とはいえ、全くの不利解であるわけにもいかない。

敵はそんな『違法則』『異常識』を用いる魔術師であり、それに対抗するには彼らの理論をある程度理解する必要がある。

例えば先の戦闘でステイルの放った炎弾を打ち消すことはできたが、その後に展開された炎の巨人イノケンティウスは消すことが出来なかった。理由はそれそのものが本体ではなかったからだ。

イマジンプレイカー
幻想殺しはあらゆる異能を打ち消すことができるが、触れた対象に現在働いている分の力にしか効果はない。

ステイルの『炎の巨人イノケンティウス』は、周囲にばら撒かれた『刻印ルーン』によって

映し出された映像の様なものである。そのため映写機である『ルイン刻印』を排除しない限り、映像は何度でも蘇える。

あの時はインデックスがそれを指摘し、スプリンクラーを発動させてインクを洗い流すという荒業で解決できたが、向こうも今度はそれに対する対処をして襲ってくるだろう。

そして毎回インデックスからの助言が得られるとは限らない。ならば事前に出来得る限りの情報入手し、その場で自ら判断できるようにしておくのは必要な事だ。

（それは分かってんだけど……、正直ついていけません）

10万3000冊
世界中の魔術を記憶しているインデックスはもとより、オカルトの蒐集が趣味だと公言する氷室もかなり博識で、そんな両者による魔術談義は専門用語が続々と飛び交う内容はかなりのハイレベル仕様となっている。そこに魔術初心者の上条が加わったところで、用語一つ一つに注釈を入れてもらわないとサッパリ理解できない。言うなれば今の上条は若者の会話についていけない御老人、と言った所だ。

妙な疎外感を感じ、思わず黄昏てしまう。

「あ、とうま」

「遅いわよ、上条君。缶ジュース一本に何時間かけてるのよ」

魔術談義がひと段落したことで上条の帰還に気付いた二人が上条へと振り返る。

そして相も変わらず手厳しい氷室の一言に上条はガツクリと肩を落とした。

「おまえなあ……、こちららご所望の品を手に入れるため炎天下の中を延々彷徨うハメになつてたんだぞ。てか『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』ってなんだよ。お茶なのか？ コーヒーなのか？ それともガラナ？」

「お茶でありコーヒーなのよ。しかもガラナ成分によりカフェイン

増量で徹夜したいときのお供に最適よ。微糖だからカロリーも控えめだし」

「いや、そういう問題か？」

どこからどう見てもゲテモノかはたまたネタとしか思えない飲み物だが、学園都市ではよくありがちな商品でもある。

学園都市は超能力の研究が基本ではあるものの、それに引きずられるように様々な分野での研究もおこなわれている、いわば『実験都市』でもある。

無数に存在する大学や研究所などで作られた『商品』の『実地テスト』として、街の至る所に生ゴミの自動処理オートメーションや自律走行する警備ロボットなどの『実験品』が溢れている。それは当然食品の分野にも及び、コンビニや自販機などにもそういった『実験商品』が立ち並び、ぶ訳だが、

「訳だが、やはり学生達は同じお金を払って買っているんだという事実が何故偉い人には分らないのかと問い詰めたい」

「普通の商品も売ってるんだから、嫌ならそっちを買えばいいだけじゃない？ てか、ぬるっ！？」

上条の手から買い物袋を引たくり中を漁っていた氷室が、取り出した缶ジュースを前に眉を顰めた。

「しゃーねーだろ。この猛暑の中を歩いてればそりゃ温くもなるって」

「っていうか、コレ受付横の自販機に置いてあったでしょ」

「売り切れてたんだよ。だからわざわざ外まで買いに行つたんだろーが」

希望を聞いた際に「間違つたら殺すから」とまで言われたら、さすがの上条も「ありませんでした」と引き下がるわけにもいかない。あの時の氷室の目はマジだった。マジで殺す気だった。缶ジュース一本でどうしてそこまで思いもしたが、そんな理由で殺されでもしたら笑い話にもならないので、上条は真夏の猛暑日記録を絶賛更新中の外への買い出しを決断したのだ。

「……って、何故に飽きた目でみられてるのでせう?」

「飽きてるのよ、マリアナ海溝の底から」

「そこまで!？」

「なかったのならないって言いに来ればいいだけでしょ」

「いや、殺すとか言っただけじゃなかったか？」

「とうま。サツキは『間違ったら』って言ってたけど『なかったら』とは一言も言っただけよ？」

「あー……」

言われてみればその通り。氷室の剣幕にビビッて早とちりした上条の落ち度である。

「温いと不味いのよね、コレ」

「んじゃ、飲まなきゃいいだろうに」

「飲むために買ってこさせたんだから、飲まないわけにもいかないでしょ」

そういうと氷室は徐に袋の中の缶を全て空中へと放り投げた。放り投げられた缶はそのままベットのの上には落ちずに、空中で停止する。

「うわあ！　とうまとつま、何もないのに缶ジュースが浮かんでるよ！」

「あー、それは氷室の能力だ。物を止める事ができるんだとよ」

「へえー」

まるで遊園地のショーを見ている子供のように目をキラキラさせたインデックスがしきりに手を伸ばし、宙に浮かんだ缶の周囲を探っている。

10万3000冊の魔導書とそこに記述された無数の魔術を知りながら、超能力による現象に目を輝かせる様は何とも不思議な感じだ。(けど、逆の立場だったら俺も同じような反応をするかもな)

——は、そんな事考えている暇もなかったため、そうはならなかったが、もう少し落ち着いた場面で、もうちょっと穏便な魔術を目に

していたら、純粹に驚き感動できただろうと思う。

そんなインデックスの反応にも興味を示さず、一人何かを観察するかのよう周囲を窺っていた氷室は、「うん」と一つ頷くと、

「上条君。ちよつとその窓開けてくれる？」

「窓？　つてか何する気だよ」

冷房の利いた病室の窓を開ければ当然のことながら外の熱気が入り込んで、室温は高くなる。

ついさっきまで茹だるような熱気にさらされていた上条にしてみれば、もう少しこの涼しさを味わっていたいところなのだが、

「念の為よ」

「だから何の」

上条の問いに対し、氷室はニヤリと笑みを浮かべると指を一本突き立てる。

「おバカな上条君に問題です。物体の状態変化はなぜ起きるのでしようか？」

「いや、いくらなんでもそれはバカにし過ぎだろ。それぐらいわかるつーの。温度変化によるものだろ？」

今日日、小学生だって答えられる問題だ。高校生である上条がいくらバカだかと言つて、そこまでバカにされると実に不愉快だ。

「じゃあ、何故温度が変化すると状態が変化するのでしょうか？」

「そりゃ……」

問題のレベルが上がったが、それでもまだ答えられるレベルだ。

上条は少しだけ時間を取り、考えをまとめると、

「……温度が上昇すると分子の運動が激しくなるから、だろ。分子同士の引き合う力よりそれが大きくなると分子が散らばるから気体になる。逆に温度が下がると引き合う力の方が強くなるから集まって固体になる」

「正解。つまり温度の変化は分子の運動量に比例するって事ね」

「まあ、そうだな。それが？」

再度上条が問いかけると、氷室はさらに笑みを濃くし、

「では最後の質問。分子の運動量が0になるとどうなるでしょう？」
「どうってそりゃ……」

分子は動かなくなるわけだから、それに比例する温度は当然下がる。それも最低値まで。

(……、最低値？)

氷室の能力は『物体に働くベクトルの量を0』にするという力だ。つまり分子の運動量を0にすることができる。

そして分子の運動量が0となった物体はその温度が最低値にまで下がってしまう。

つまり0度。ただし単位は^{セリシウス}ではなく^{ケルビン}K。

「ねえ、上条君。“絶対零度”って知ってる？」

「ちょ、ま——」

止める間もなく、氷室はパチリと指を鳴らすと、その瞬間病室の中が真っ白な煙で覆われた。

「ひゃい！？ な、なにこれ、冷たい！？」

冷たいというよりむしろ寒い。外では絶賛猛暑日記録更新中なのに、ここだけ南極大陸のど真ん中にいるみたいに寒い。

(真夏に凍死なんて冗談じゃねーぞ！？)

上条は慌てて窓に噛り付き、開け放つ。

同時に物凄い勢いで突風が舞い込み、上条が盛大に吹き飛ばされたが、程なくして部屋中を覆っていた冷気の煙は綺麗サッパリ姿を消した。

「何しやがる、氷室！」

「少しは涼しくなっただんじやない？」

「涼しい通り越して凍死するわ！」

「だから窓を開けてって言ったんじやない」

「事前に説明しろよ、そういうことは！」

「でも頭は冷えたでしょ？」

「……………」

上条は言葉を返すことが出来なかった。

どうやら病室の前で切り替えたつもりだったが、切り替えきれていなかったらしい。

そんな上条の頭を完全に切り替えさせるために、氷室はこんな茶番

——にしては命がけだった様な気もするが——を演じたようだ。

ニヤニヤと笑う氷室に眉を顰めながらも、“また” 氣遣われたことに不甲斐なさを感じ、上条はガシガシと頭を搔く。

「それより、ハイ」

そう言つて放り投げられた缶ジュースを受取るうとし、

「つて、ちよつと待て！」

直前で手にするのを止めた。

ギリギリのところで止めたため、缶はそのまま地面へと落ちるかと思われたが、才覚ある氷室によつて即座に『止められた』ため事なきを得ている。

それよりも、だ。

「“絶対零度”^{そんなもん}に触れたら手が張り付いて取れなくなるだろーが！」

「あんたバカあ？」

心底飽きた、と言つた風に半眼を投げかけ、氷室は手に持った『宇治抹茶珈琲ガラナ風味・微糖・』を開け口に含む。

「張り付くはずなら、そもそも投げられないでしょうに」

「あ……………」

氷室が投げ渡したということは、それが張り付いてしまうほどの低温では無いという事だ。

例に指先でつついてみると、確かに冷えてはいるが張り付くことはない。

「うわあ、ホントに冷たくなってる。ねえサツキ。これもサツキの超能力なの？」

「厳密にはその応用ね。さっきの話は聞いてたわよね？」

「うん。温度はブンシつていうのに比例するってやつだよな」

「ええ。分子っていうのは物体を構成する粒子の様なものよ。物体はその粒子が集まってできてるの」

わかる？ と科学側の事情に疎いインデックスに講義を開始する氷室。

その生徒であるインデックスが頷くのを確認し、

「温度——熱って言うのは隣り合う2つのものの間に差があると、自然と両者を平均の値にして保とうとする性質があるのよ。だから温かい部屋の中に氷の塊を置いておくと、温度の高い空気が低い氷に熱を分け与え、氷は温度が上がって溶ける。逆に室温は熱を奪われるから低くなるの。さっき部屋の温度が下がったのはそのせいよ」

「つまりサツキが超能力で氷を作ったから、部屋が冷たくなったってこと？」

「そう。そして上条君の懸念はこの缶自体を氷にしたと思ったからでもそれだと飲めなくなっちゃうでしょ？ だから私が凍らせたのは缶ジュースじゃなくて、その周囲の空気の方。それもほんの少しだけ凍らせたのよ」

「それであんな風に真っ白になっちゃうの？」

「なっちゃうの。私の能力は『運動量を0にする』ことしかできないから、これで物を凍らせると必ず - 273 . 15 にしかならないのよ。この温度は“これ以上下がることのできない温度”だから、大量の熱がそこに奪われて、周囲の空気に含まれる水蒸気が一気に氷になっちゃうの」

「つまりさっきの煙は、煙じゃなくて霧なんだね」

「そういうこと」

すごいね、と素直に感心し、手にした『練乳紅茶 - 糖分控えめ -』を口にするインデックス。しかし直後に「うえ〜」と強烈な甘さに舌を出して音を上げた。さすがに糖分控えめと謳っていても練乳の甘さは緩和しきれていなかったらしい。

一方上条も手に取った緑茶（こちらはごく普通の緑茶だ）を口にしながら、ふと感じた疑問を投げかけた。

「確かにすごいけど、なんだか面倒臭くないか、ソレ」

「面倒よ、すごく面倒。ベクトル量を自由に操ればこんな手間かけずとも冷やすことはできるのに、0にしかできないから“周囲の気体をクツシユンにして低下度合いを調節する”なんて回りくどい方法を取らないといけないのよ」

その結果が、真夏の凍死未遂というのはさすがに笑えない話だが。

「氷室もいろいろ苦勞してるんだな」

「そうね。できればこんな能力じゃなく、普通に^{バイロキネシス}発火能力とか^{サイコキネシス}念動力とかでよかったのに」

「何の能力が発現するかなんて、『開発』してみなきゃわかんねーもんね」

「上条君の場合は、天然でしょ？」

「ああ、生まれつきみたいだな。もっともそうだと知ったのは^こ学園都市に来てからだけど」

異能の力にしか反応しないため、その力が存在しない一般の生活の中ではまず気付くことのない能力である。むしろ、能力自体を持っている事すら気づくことができない類だ。

「原石、ね」

「げんせき？」

再び見知らぬ言葉を聞き、インデックスが首を傾げた。

「天然ものの超能力者の事よ。学園都市では薬物とか電気刺激とかで人為的に『開発』することで能力者を“作り出し”てるけど、世の中にはそんな方法に頼らずとも稀に超能力を手にする人がいるのよ。それを私たちは『原石』と呼ぶの」

「もっとも“居るだろう”ってレベルの噂だけだな」

「あら、原石はちゃんと存在するわよ？」

「そうなのか？」

「ええ。でなきゃそもそも超能力の研究なんて行われる筈がないじゃない。『開発』の方法はその研究の過程で生み出されたものなんだし」

「言われてみれば……」

「それに上条君自身がそうなんだから、それを否定するってのもどうかと思うわよ？」

「あー、そういわれてもそんな実感とかあんなないしな……」

「まあ、そうでしょうけど……」

そう締めくくると、病室内に束の間の静寂が訪れる。

特に誰かが何かを話そうとするわけでもなく、ただ全員が自らの手にする缶ジュースに口をつけチビチビと飲み干していく。

それが不思議と気まずくなく、むしろ穏やかとも呼べる心地よさを感じるぐらいだ。

『宇治抹茶珈琲ガラナ風味・微糖・』なんてゲテモノを平然と飲む氷室。

『練乳紅茶・糖分控えめ・』の過激な甘さに舌を出しつつも飲むのをやめようとしなないインデックス。

そんな有り触れた平和な光景を見ると、このまま時間が止まればいいのに、とそんな埒もないことを上条は感慨深く思ってしまう。

だがそれが叶わぬ望みであることなどわかりきっている。時を止めるなんてこと超能力でも、おそらく魔術だって不可能だ。神様だってそんな事できないかもしれない。

だからいつかは終わりが来る。

そしてその“いつか”はもうすぐそこまで迫っているのだ。

（出さないとな、答え……）

終わりが来る、その前に――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4098x/>

とある最強の抑止力

2011年10月19日02時11分発行